

古神遺跡

箕輪町農業集落排水事業、長岡排水処理施設
建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1991年

箕輪町教育委員会

吉神遺跡

箕輪町農業集落排水事業、長岡排水処理施設
建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1991年

箕輪町教育委員会



土器集中造構出土土器

序

箕輪町教育委員会

教育長 堀 口 泉

古神遺跡の位置する長岡地籍は、沢川によって形成された扇状地で、地味の良い肥沃な地として知られ、古代から高い生産があったものと推定できます。また、一帯には、数多くの古墳が存在し、町内における古墳の半数以上が集中する、いわゆる長岡古墳群を形成しています。このように古くから歴史性豊かな場所であり、西に面する自然地形は、人々の生活に適した条件を備えていました。

箕輪町は、平成元年から長岡地籍に、農業集落排水事業を進め、それに伴う処理場建設が実施される計画となったのであります。

周辺は、古くから土器などの出土がみられ、古神遺跡として周知されていました。事業実施前に発掘調査を行ない、記録保存することになり、約1カ月間の作業により、縄文時代から弥生時代の遺構・遺物が確認されています。

調査の内容については、後述の通りであります。本書が、地域の歴史を留める一助となれば幸いと存じます。

報告書刊行にあたり、調査に際し深いご理解をいただいた地元長岡区の方々、また、直接調査に参加ご協力下さった団員の皆様方に、心から感謝申し上げます。

例　　言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪1122番地他に所在する古神遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、箕輪町教育委員会が行なったものである。調査は、平成2年9月27日から12月13日まで実施し、引き続き整理作業及び報告書の執筆作業を行なった。
3. 本書を作成するにあたって、作業分担を以下の通り行った。
 - ・土器の復元－福沢幸一
 - ・遺構図の整理・トレース－赤松　茂、宮脇陽子
 - ・遺物の実測・トレース－赤松　茂、宮脇陽子
 - ・土器拓影－井上武雄、山内志賀子
 - ・揮団作成－赤松　茂、井上武雄、宮脇陽子
 - ・写真撮影・図版作成－赤松　茂、征矢　進
4. 遺構図は、次の縮尺に統一した。
土　壙－1：40
5. 遺物実測図、拓影図は、次の縮尺に統一した。
縄文土器・弥生土器－1：4、縄文土器拓影図－1：3、石器－2：3、1：3
6. 土器実測図及び土器拓影図の断面は、粘土帶の接合状況の観察できるもののみ断面に表示した。また、縄文土器拓影図断面のスクリーントーンは、鐵錐混入を表わす。
7. 本書の執筆は、赤松　茂、宮脇陽子が行なった。
8. 本書の編集は、赤松　茂、井上武雄、柴登巳夫、根橋とし子、樋口彦雄、福沢幸一、宮脇陽子、山内志賀子が行なった。
9. 本調査及び報告書の作成に当たって、下記の機関並びに各個人の方々に御指導御協力いただきいた。記して感謝申し上げる。
機　関－長野県教育委員会文化課、長野町教育委員会
個　人－赤羽義洋、桐原　健、福島　永
10. 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。広く活用されたい。

本文目次

題　字	團　長　樋　口　彦　雄
序	教育長　堀　口　泉
例　言	
本文目次	
挿図目次	
図版目次	
第I章　遺跡の立地.....	1
第1節　位　置.....	1
第2節　自然環境.....	2
第3節　歴史環境.....	3
第II章　調査の経過.....	5
第1節　調査に至る経過.....	5
第2節　調査団の編成.....	5
第3節　調査日誌.....	7
第III章　遺跡の状態.....	11
第1節　調査の方法と結果.....	11
第2節　層　序.....	12
第IV章　遺構と遺物.....	14
第1節　検出遺構.....	14
1. 土　壙.....	14
1号土壤.....14, 2号土壤.....15, 3号土壤.....15, 4号土壤.....16, 5号土壤.....17	
2. ピット状遺構.....	17
3. 土器集中遺構.....	18
第2節　遺構外出土土器.....	21
1. 繩文時代早期.....	21
2. 繩文時代前期.....	21
3. 繩文時代中期.....	21
4. 繩文時代晚期～弥生時代中期.....	24

5. 弥生時代後期	33
第3節 遺構外出土石器	33
第V章まとめ	34

挿図目次

第1図 位置図	1
第2図 周辺遺跡分布図	4
第3図 調査区設定図	10
第4図 調査区グリット設定及び遺構配置図	11
第5図 土層図	13
第6図 1号土壤実測図及び同出土遺物実測図	14
第7図 2号土壤実測図	15
第8図 3号土壤実測図及び同出土遺物実測図	16
第9図 4・5号土壤、ビット状遺構実測図	17
第10図 土器集中遺構実測図	18
第11図 土器集中遺構出土遺物実測図	19
第12図 遺構外出土土器拓影図1	22
第13図 遺構外出土土器拓影図2	23
第14図 遺構外出土土器拓影図3	25
第15図 遺構外出土土器拓影図4	26
第16図 遺構外出土土器拓影図5	28
第17図 遺構外出土土器拓影図6・出土土器実測図	29
第18図 遺構外出土石器実測図1	31
第19図 遺構外出土石器実測図2	32

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	3
-------------	---

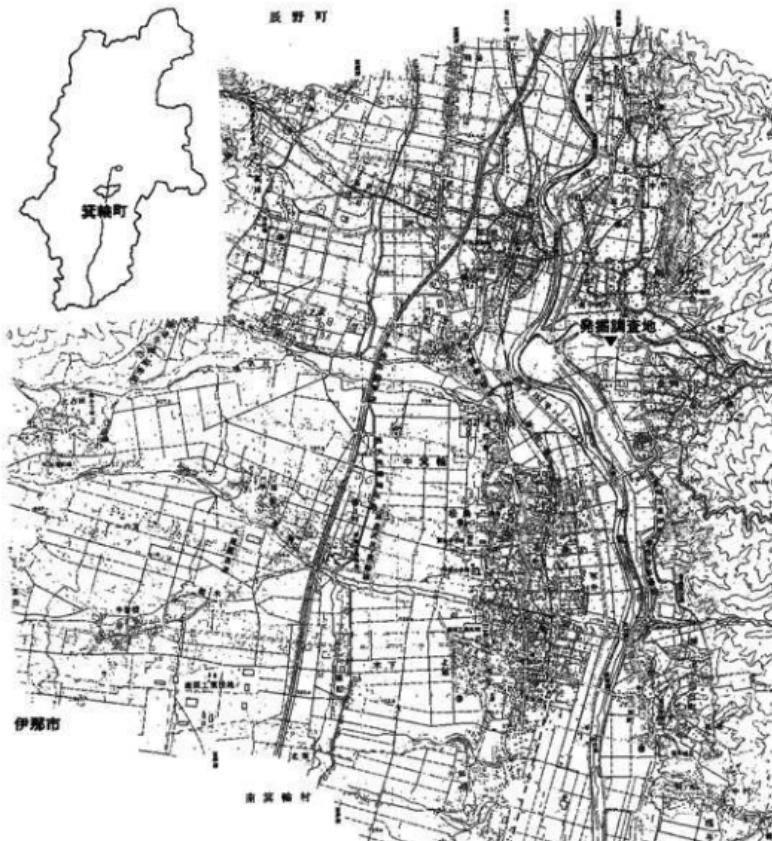
図版目次

- 図版1 遺跡地遠景（東方より）・調査地近景（東方より）
- 図版2 調査区全景・土層断面
- 図版3 1号土壤・2号土壤
- 図版4 3号土壤・4号土壤
- 図版5 5号土壤・ピット状遺構
- 図版6 土器集中遺構・土器集中遺構下ピット状遺構
- 図版7 土壤出土土器・遺構外出土土器1
- 図版8 遺構外出土土器2・遺構外出土土器3
- 図版9 遺構外出土土器4・遺構外出土土器5
- 図版10 遺構外出土土器6・遺構外出土土器7
- 図版11 遺構外出土土器8・遺構外出土土器9
- 図版12 土器集中遺構出土土器・遺構外出土弥生土器
- 図版13 出土石器1・出土石器2
- 図版14 出土石器3・調査参加者

第Ⅰ章 遺跡の立地

第1節 位 置

古神遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪1122番地他に、北緯 $35^{\circ}55'32''$ 、東経 $137^{\circ}59'50''$ の地点で標高約707mに位置する。天竜川左岸段丘上の南小河内区は、東方の山麓から流れる沢川によって形成された扇状地にある。遺跡地は、南小河内区の南部に位置し、また扇状地のほぼ末端部にある。ここは、眺望もよく南に仙丈岳、北には守屋山を望むことができる。また、天竜川対岸の沢区、大出区が展望できる。



第1図 位 置 図

第2節 自然環境

箕輪町は、西に木曽山脈、東は赤石山脈に囲まれた伊那盆地の北方にあり、諏訪湖を源とする天竜川が、町のほぼ中心を東西に二分するように南流している。その両岸は河岸段丘と数多い扇状地とが独特の地形を作り出している。東方の山麓から流れる沢川によって形成される扇状地は川を挟んで長岡区と南小河内区に分かれる。扇状地における地質構造はローム層とその下の砂岩・粘板岩を主とする円礫層・砂層で構成されている。天竜川はその扇端部を南流し、流路に沿って河岸段丘を作り上げている。段丘の突端部は天竜川や中小河川の氾濫による水害を受けにくい緩やかな傾斜地である。段丘下には扇頂部や扇央部より地下に浸透した水が伏流水となって天竜礫層と沖積層の境に出る湧き水が多く、扇状地を流れる小河川の水利とあわせ、豊かな水源に恵まれている。

古神遺跡は、この扇状地の突端部にあり、上記の通り恵まれた自然環境の中に存在していると言えよう。



遺跡周辺地形

1 : 10000

第3節 歴史環境

天竜川左岸段丘上一帯は竜東地区と呼ばれ、ここには長岡区、南小河内区が東部の一単位として存在している。地形は天竜川沿岸水田地帯から小段丘や扇状地を経て伊那丘陵になっている。この竜東地区的遺跡の分布状況は、沢川の河岸段丘上にみられる遺跡（1、2、3、5、12）と、山裾に広がる遺跡（4、6～11）とに分けられる。古神遺跡は、前者の代表的な遺跡と言える。後者の遺跡の多くは、長岡区にあり、ここは昔から土地が肥沃であるため人々の生活の舞台であった。また、以前は30基前後の古墳が存在していたが、現在では10基ほどが確認できるのみである。沢川を隔てた南小河内地籍の舌状台地上に、上の平城跡（遺跡）がある。

これらの遺跡を保護していく上でも、今後この一帯における開発には、十分な注意を図っていく必要があると言える。

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	地籍	立地	時代					備考
				旧石	縄文	弥生	古墳	平安	
1	古神	長岡	扇尖		○	○			○ 今回調査
2	大坂外	南小河内	扇尖		○	○	○	○	平成元年発掘調査
3	殿屋敷	南小河内	扇尖		○				
4	普済寺	南小河内	台地		○				昭和63年発掘調査
5	日向 前	南小河内	扇尖		○				
6	上の平	南小河内	台地	○	○				昭和44年 県史跡指定
7	一之沢	長岡	山麓		○			○	昭和62年発掘調査
8	源波古墳	長岡	扇頂				○		昭和62年発掘調査
9	源波	長岡	扇頂		○			○	昭和62年発掘調査
10	角道	長岡	扇尖		○				
11	角畠古墳	長岡	扇尖				○		
12	羽幡の森古墳1～3号	長岡	段丘				○		



1 : 20000

- 古神 ● 大垣外 ● 殿屋敷 ● 舊清寺 ● 日向前
- 上の平 ● 一之沢 ● 源波古墳 ● 源波 ● 角道
- 角畠古墳 ● 羽場の森古墳 1~3号

第2図 局辺遺跡分布図

第II章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

近年、人口増加と日常生活の多様化で都市型の生活へと移り変わってゆくに伴い、各家庭から出る排水が環境汚染の要因となり、大きな社会問題となっている。町はこれに対応するため、生活環境の向上と水質保全を目的とした下水道及び排水処理施設の設備に努めている。まず始めに、南小河内区において農業集落排水事業が着手され、平成元年に供用開始となった。そして引き続き、平成元年より長岡区においても本事業が進められる運びとなった。

長岡地区には、数多くの遺跡があることは前章でも述べているところであり、事業の主体をなす排水処理場の建設が遺跡の包蔵地内になることは、当初より懸念されていたことである。そして、古神地籍に建設用地が決定したことにより、町教育委員会は、現地での検討を重ね遺跡地であることを確認した。これによって町教育委員会は、町下水道課・長野県教育委員会と遺跡の保護協議を行い、工事区域全面積の発掘調査を行ない、記録保存をするに至った。本遺跡が所在する一帯は農地になっており、開墾や耕作中に多くの遺物を出土したことは以前より知られていた。しかし、大規模な開発の行なわれていない数少ない地域の一つであるため、その内容は不明な点の多い地域であった。よって今回の調査はそれを知る手がかりとなるため重要な調査である。また、長岡区では、過去に箕輪ダム建設に係わる長岡新田に所在した遺跡や、源波古墳・一之沢遺跡の調査を行ってきており、今回の調査の行方に大きな関心が寄せられた。

このような経過によって9月27から12月13日までを調査期間とし、町教育委員会が町下水道課より委託を受けて、新たに調査団を結成して調査を実施する運びとなった。

第2節 調査団の編成

イ) 調査団

順　問	丸山敬一郎	赤穂高校定時制教頭
団　長	樋口　彦雄	
担　当　者	柴　登巳夫	箕輪町郷土博物館主任学芸員
調査主任	赤松　茂	箕輪町郷土博物館学芸員
調　査　員	福沢　幸一	長野県考古学会員
調　査　員	根橋とし子	箕輪町郷土博物館臨時職員
調　査　員	宮脇　陽子	箕輪町郷土博物館臨時職員

調査団員 井上武雄、遠藤 茂、岡 章、筒 正、春日義人、唐沢光国、小島久雄、
小池久人、笠川正秋、白鳥博臣、清水すみ子、戸田隆志、中坪侃一郎、
中坪製糸男、野村金吉、堀五百治、伯耆原正、松田貫一、松田幸雄、
水田重雄

四) 事 務 局

堀口 泉 箕輪町教育委員会教育長
上島富作夫 箕輪町教育委員会社会教育課課長
市川 健二 箕輪町教育委員会社会教育課係長
柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館主任学芸員
石川 寛 箕輪町郷土博物館学芸員
赤松 茂 箕輪町郷土博物館学芸員
酒井 蜂子 箕輪町郷土博物館臨時職員
根橋とし子 箕輪町郷土博物館臨時職員
宮脇 陽子 箕輪町郷土博物館臨時職員

第3節 調査日誌

9月27日 (木) 晴

調査に先立ち、機材運搬・テント設営を行った。10時から長岡区・実行委員長・教育長・下水道課の方々が参列しての神事を行った。午後は、調査区に6ヶ所の試掘グリットを設定し掘った。No.2からは縄文土器がかなり出土した。



9月28日 (金) 曇

試掘グリットの土層状況から判断して、重機による表土はぎを行なった。1mくらい掘り下げたところから遺構の跡らしい土が確認された。また、午後には標高移動も行い、調査区付近にベンチマークを落とした。

9月29日 (土) 曇後雨

重機が動く中、全員で上面確認を行なう。東から西へと土をかいてくるが、疊が多く苦労を要す。遺物は縄文土器片などが出土する。

10月1日 (月) 曇

調査区を西からA区・B区・C区に仮区画し、作業を進めた。上面確認はA区から始められていた。古錢が2枚出土する。石鐵も出土するが、それに伴う遺構の検出はなかった。

10月2日 (火) 晴

A区・B区を班ごとで上面確認を行なった。また、A区の東側をきれいにして、土層断面の測量ができるようにした。B区からは、拳大の黒曜石が数個出土した。

10月3日 (水) 晴

A区の東側の壁の土層断面を測量する。A区・B区は引き続き上面確認を行なう。また、A区・B区内にそれぞれサブトレA、サブトレBを設け、黄色砂疊土層まで掘り下げた。

10月4日 (木) 曇

サブトレA・Bの掘りを行なう。サブトレBからまとまって土器片が出土した。また、C区を小型の重機を使って掘り下げた。



10月5日 (金) 曇

サブトレBの土層断面及び土器の測量を行なう。測量後、土器を取り上げ、周囲を調査してみたが、遺構は見つからなかった。A区、

B区の掘り下げが行なわれる。

10月11日 (木) 晴

A区、B区は引続き掘り下げを行ない。C区も上面確認を始める。C区へサブトレを設け、掘り下げた。どの区、どのサブトレからも遺構は見つからない。

10月12日 (金) 晴後曇

A区の土目が明確でないため、サブトレBを基準にしてさらに細かくサブトレを設けた。測量はサブトレCの土層断面を行う。

10月16日 (火) 晴

サブトレCを基準にC区の掘り下げを行なう。また、B区で検出された。土壤の半割も行なわれる。

10月17日 (水) 晴

C区の掘り下げの続きを行なう。B区同様黒褐色土層中から土器片が出土した。しかし、遺構は検出されなかった。1～3号土壤の平面測量も行なう。

10月18日 (木) 晴

1、2班C区の上面確認を行なう。測量も各土壤の土層断面やエレベーション、平面測量を行なう。サブトレCの北側から縄文土器1個体がつぶれた状態で出土した。

10月19日 (金) 晴

C区の掘り下げの続き。土器が出土したので、慎重に作業が進められる。

10月20日 (土) 晴

C区の掘り下げの続き。土器の測量も開始する。また、エレベーションと同時にとり上げも行なう。口縁部から底部までほとんどまとまってみられた。

10月22日 (月) 晴

C区の掘り下げの続き。土器が出土したので慎重に作業を行なうが、遺構は検出されなかつた。

10月23日 (火) 晴

調査区の南西側にトレンチAを、東側にトレンチBを設定し掘削する。トレンチAの黒褐色土層中から土器片が多量に出土するが、遺構は検出されなかつた。



また、トレントBの壁けずり、断面測量を行う。

10月24日 (水) 晴

トレントAの掘り下げと壁けずりを行なう。

午後には機材及びテントの撤収も行なわれ、

また、地形測量も兼ねた全体測量を行なった。

10月25日 (木) 晴

トレントAの土層断面の測量と5号土壤の

平面測量、エレベーションを行う。



10月26日 (金) 曇

トレントAの土層観察と全体測量をとる。

12月13日 (木) 晴

重機による埋め戻し作業を行なう。本日にて古神遺跡の調査をすべて終了した。



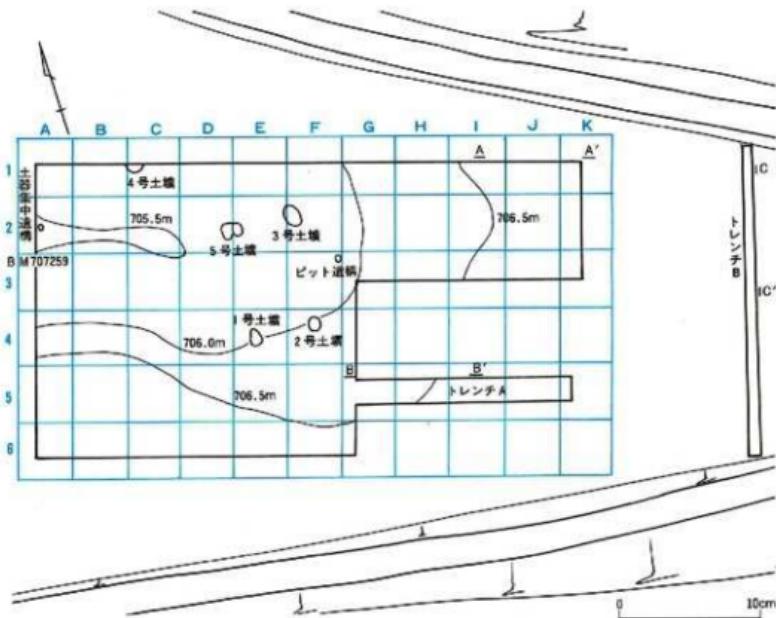
第3図 調査区設定図

第III章 遺跡の状態

第1節 調査方法と結果概要

今回調査区として設定した一帯は、一部水田も含まれるがほとんど畑地であり、耕作などによる上層部の攪拌が行なわれてはいないものの、地形的に大きな変化はなされていない。また、過去においても発掘調査が行なわれていないため、付近一帯の遺構・遺物の埋蔵状況は不明な点が多い。調査区は、建設予定区域の中において直接地盤を動かす900m³に対して設定を行ない、緑地化などで地盤への影響がない部分においては、地下遺構等を把握しておくためにトレンチを設定して調査に当たった。

調査はまず2m四方の試掘坑6ヶ所を設定し、手掘りによる土層堆積状況と遺構の確認を行なった。その結果、土器片などの遺物を包含する黒褐色土層(II層)までの耕土20~40cmを大型重機によって耕土し、その後は手作業による遺構の確認と検出に努め、測量・写真などの記録を行なった。そして、遺構の確認は、状況に応じてサブトレンチを設定し行なった。尚、調査区内の一部に梅林が含まれるため、その抜根作業には地下遺構への影響が極力及ぼさないように



第4図 調査区グリッド設定及び遺構配置図

に、小型重機を導入し、慎重に作業を進めた。また、排土や土の移動についても、小型重機の使用により作業の能率を図った。グリットは4m四方とし、調査区に併せて設定し、南北方向はローマ数字で東西方向はアルファベットを用いて標記した。またベンチマークは、調査区の東方約300mに所在する水準点より標高移動を行ない、調査区の西側にベンチマーク(707.259m)を落とした(第4図)。

調査の結果、V層を基盤とする土壤が5基、ピット状遺構1基、土器集中遺構1ヶ所を検出した。土壤及びピット状遺構は、形状・掘り込みが不規則でかつ遺物を伴わないものがほとんどであるため、時期及び性格については不明の点が多い。土器集中遺構は、縄文時代中期初頭に属する大型土器一個体が出土している。尚、II層(黒褐色土層)中より縄文時代早期から弥生時代後期までの土器片を中心とする遺物が多量に出土しており、遺構の存在を確認できなかったため、遺物包含層一括出土として扱った。特に縄文時代晩期から弥生時代中期初頭にかけての条痕文系土器を中心とする一群の出土が目立った。また、その詳細については後述するものである。

第2節 層序

天竜川東岸における扇状地並びに段丘上における地質構造は、耕土などの黒褐色腐食土→ローム層→砂岩・粘板岩・花崗岩を中心とする円礫層・砂層という堆積状況が普遍的にみられ古神遺跡の所在する長岡扇状地においても、この堆積状況を基本としている。また前節でも述べているが、調査地一帯は地形的に大きな変化を受けていないため、耕土(I層)以下は自然堆積の状態を残している。しかし、分層による各層の堆積状況は一応統一性はみられるが、部分的に各層及び全体の堆積深度に差は認められた。

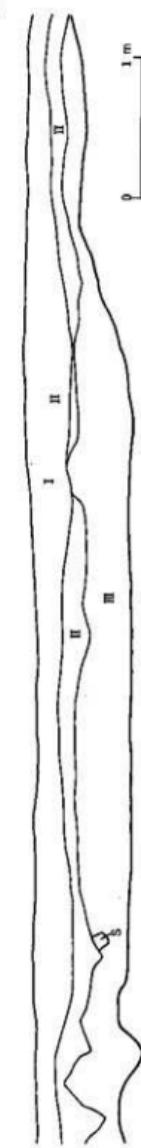
I層—暗茶褐色土。粘性はややあるが、締りはほとんどみられない。部分的に円礫を多く含んでいる。畑地として使用されていた耕土である。

II層—黒褐色土。粘性は強く、締りはやや感じられる。円礫及び炭化物をまばらに含む。条痕文土器を中心とする縄文時代晩期末葉から弥生時代中期初頭にかけての土器片及び石器を最も多く包含する。

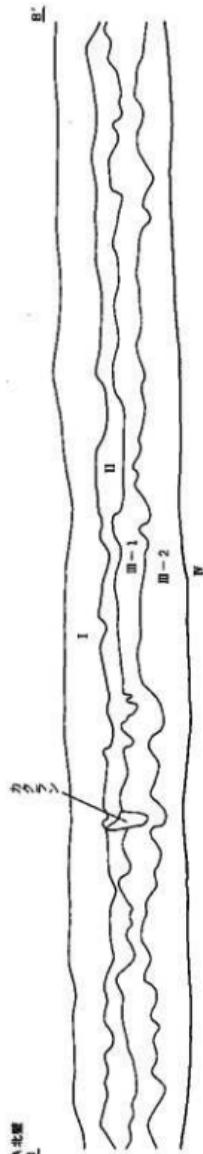
III層—茶褐色土。粘性はややあり、締りもややある。円礫をまばらに含んでいる。部分的に細分が可能で、ロームブロック及び粒子を多く含む明茶褐色土も確認されるが、大差はみられない。また遺物はまばらに含まれるが、縄文時代中期初頭のものが主である。尚、遺構の検出はIII層上面において慎重に行なわれたが、明確なプランの確認はできなかった。

IV層—黄色土(ローム層)。粘性はあまりないが、締りは強い。部分的に砂礫を多く含む。本層検出面において、遺構の存在を確認した。

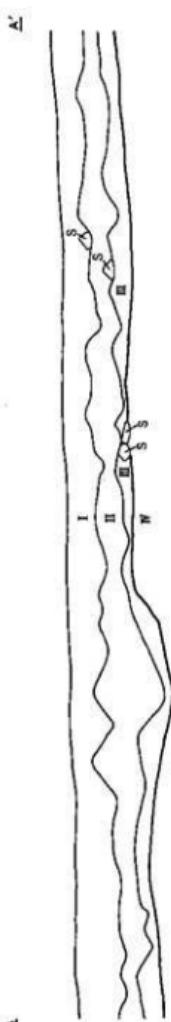
第五圖 土 壤 図



トレンチC断面
708.0m



トレンチB北壁
707.3m



調査区北壁
707.6m

第IV章 遺構と遺物

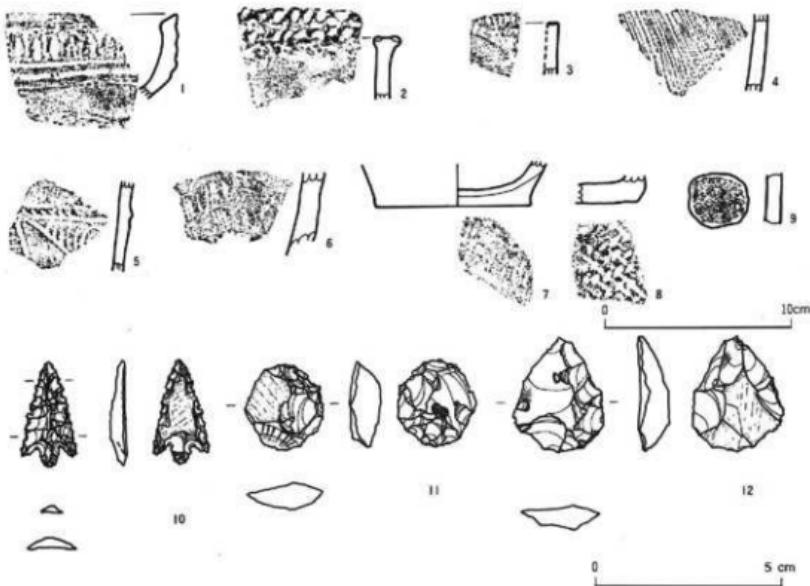
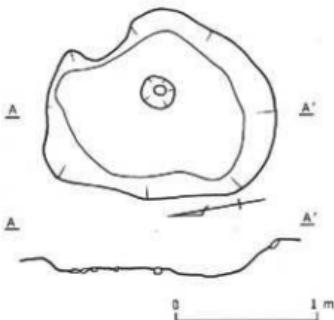
第1節 検出遺構及び遺物

1. 土 壤

1号土壤 (第6図)

調査区のほぼ中央部F-4グリットに位置する。規模は、 $1.6 \times 1.4\text{m}$ で梢円形プランを呈する。深さは0.25mを測り、断面は半円形である。底面は軟弱で凹凸が目立ち、V層中に含まれる円礫が露出している。覆土は、△黒褐色土の単一層で、ローム粒子をまばらに含む他は、混入物は特に認められない。粘性及び締りはやや認められる。

遺物は、土器片及び小型の石器類が覆土中より出土している。土器は、縄文時代晩期末葉から弥生時代中期初頭に属するものが主体を成しており(2~10)、1



第6図 1号土壤実測図及び同出土遺物実測図

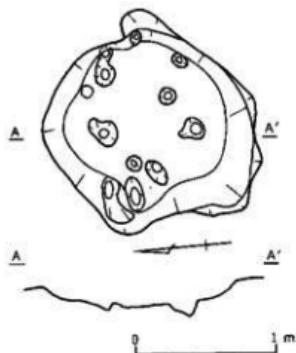
点のみ縄文時代中期初頭のもの（1）が混入している。1は、内湾ぎみに立ち上がる平線の口縁部片で、半截竹管状工具により横走する平行沈線と、大小2種の竹管状工具の使用による連續弧状文とで、文様構成を行なっている。2は、ほぼ直に立ち上がる壺の口縁部片と思われ、口縁端部は面取りされた後に、その両縁をヘラ状ないし竹管状工具により連続する押圧を施す。また、外面は継位にヘラケズリが、内面は細密条痕がなされる。3は、面取りされた口縁端部ヘラ状工具による刻み目があり、外面は無文部を残しへらないし竹管などの比較的太めの工具による条痕が施される。4は、ヘラ状工具による格子状に条痕が施される深鉢ないし壺の胸部片である。5は、刻み目のはいる隆線と、区画による沈線文が施される。6は、他と比べ器壁が厚く、外面には幅広の爪形文が施される。7・8は、底に網代痕を残す底部片である。9は、土器片の周縁に二次加工を施した土製円盤である。10は、両面調整ではあるが表面において丁寧な剥離が、及び裏面には自然面を残し、やや反り身の凸基有茎鐵である。11は、表面に一部自然面を残すが、両面調整によるスクレイバーである。12は、加工途中の石鐵と思われる。またこれらの石器類はすべて黒曜石である。

2号土壌（第7図）

調査区の中央部、E-4グリットに位置する。1.5×1.4mの規模で、やや不正形ではあるが円形プランを呈する。深さは0.5mを測り、断面は半円形である。底面は、1号土壌と同様に軟弱で凹凸が目立ち、V層中に含まれる円礫が抜けた痕跡と考えられる。覆土は、暗茶褐色土の単一層で小礫をわずかながら含んでいる。また、粘性はやや感じられるが、締りはほとんどみられない。

遺物は、覆土中よりわずか数点ではあるが、土器片を出土している。

3号土壌（第8図）



第7図 2号土壌実測図

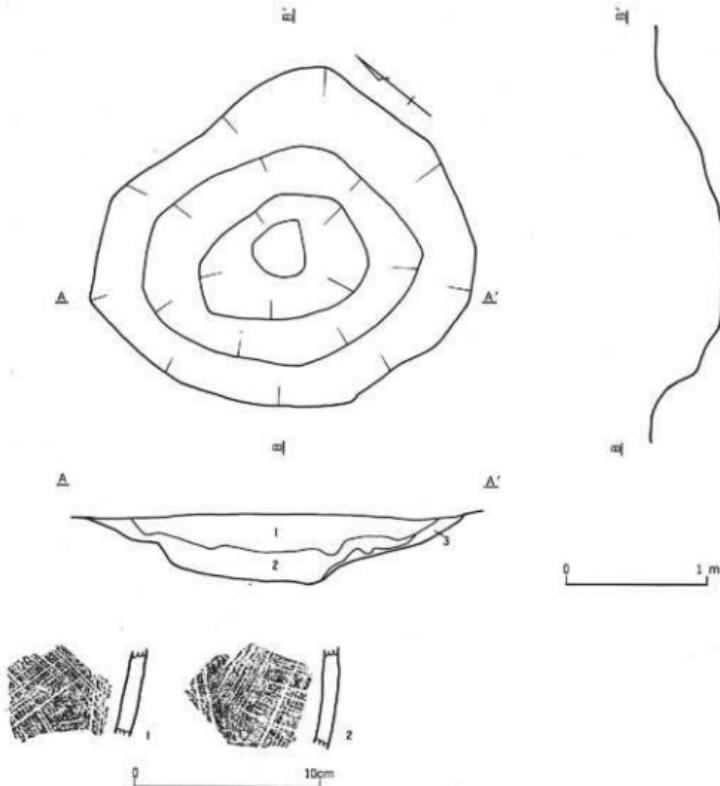
調査区の中央部からやや北よりのF-2グリットに位置する。2.7×2.4mの規模で、すり鉢状に掘り込まれ、検出した土壌の中では最も大きいものである。形状は、横円形プランを呈している。深さは、0.5mを測り、断面は三段構造となっており、不正形ながら半円形を呈している。覆土は、3分層された。1層は茶褐色土で、粘性・締りは共にあり、小礫を多量に含んでいた。2層は、黒褐色土で、粘性はややあるが、締りはあまり感じられなく、小礫をまばらに含んでいた。3層は、黄褐色土で、粘性・締りは共にやや認められ、

小疊をまばらに含んでいた。また、本土壤の周辺部、特に東側において本土壤構築の際に掘り出されたと思われる黄褐色土（V層）のブロックが、検出作業中に多量に認められた。

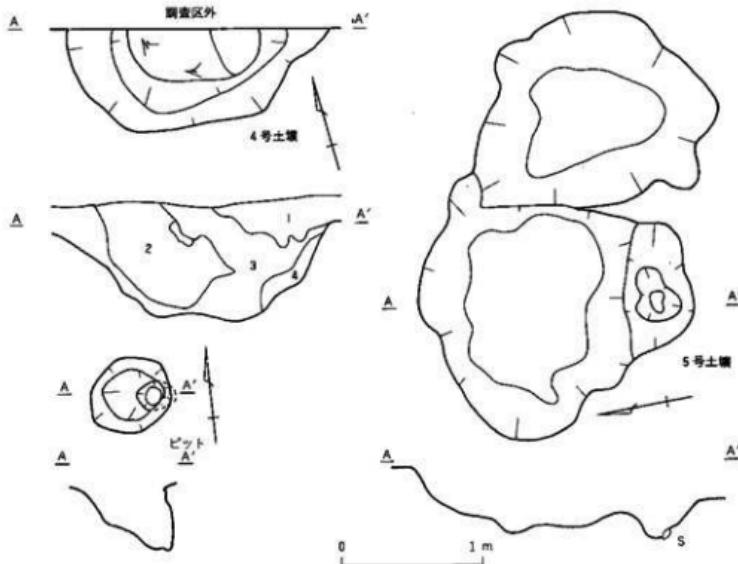
遺物は、覆土中より数点の土器片が出土している。1・2は、同一個体のものであり、ヘラ状ないし棒状の工具により、斜方向に沈線に近い条痕を施すものであり、条線と条線とが不規則な格子目状に交差している。また他に、無文土器や底部片もみられる。

4号土壤（第9図）

調査区の北西部、C-1グリットに位置する。しかし本土壤は、ちょうど調査区の境界域にかかっているため、およそ50%しか検出されず、全体の把握はできなかった。境界の壁面に確認できた幅は1.8mで、深さは0.9mと深く、埋没部分を加えればかなり大型のものではないかと予測される。覆土は4分層することができた。1層は茶褐色土で、粘性・締り共にやや認め



第8図 3号土壤実測図及び出土物実測図



第9図 4・5号土壌、ピット状造構実測図

られた。2層は黒褐色土で、粘性・締り共にやや認められた。3層は暗茶褐色土で、粘性はややあり、締りは各2層より強い。4層は明茶褐色土で、粘性・締りは共に認められ、ローム粒子を多く含んでいた。また各層中に炭化物と小礫がまばらに含まれる。遺物の出土は認められなかった。

5号土壌（第9図）

調査区の中央部やや西よりのD-2のグリットに位置する。1.9×1.7mの規模で、不正形ではあるが円形プランを呈する。深さは0.6mで、断面は半円形を呈し、底面は軟弱で凹凸が目立つ。覆土は、黒褐色土の単一層で、粘性・締り共にやや認められた。遺物は、条痕文・無文の土器片が数点出土している。また、石器の出土はみられなかった。

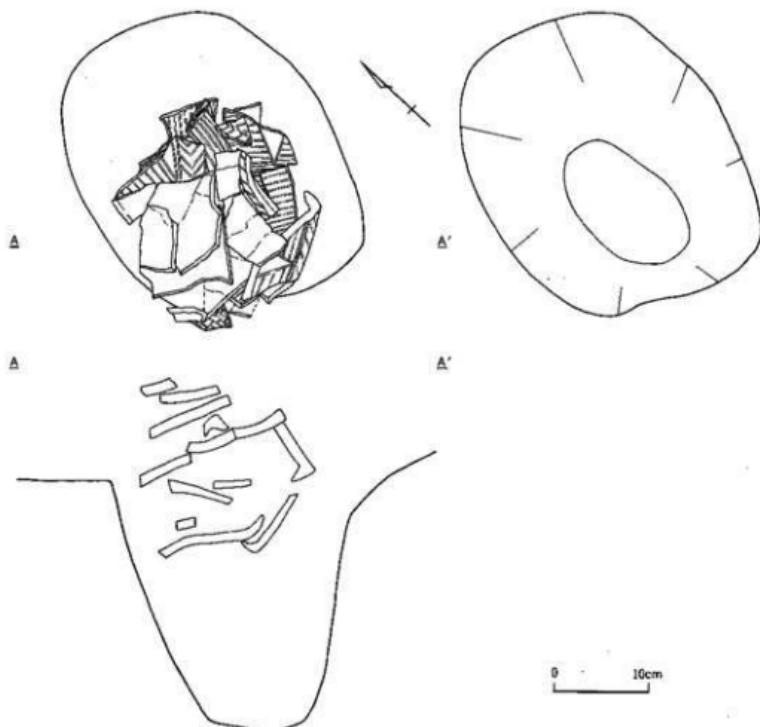
2. ピット状造構（第9図）

調査区の中央部、F-3グリットに位置する。直径0.6mの円形プランを呈し、深さは0.8mを測り、東方向に斜めに抉るように掘り込まれる。底面は硬く、土壌とは異なっていた。また覆土は、暗茶褐色土の単一層で、粘性は強く、締りはやや感じられる。

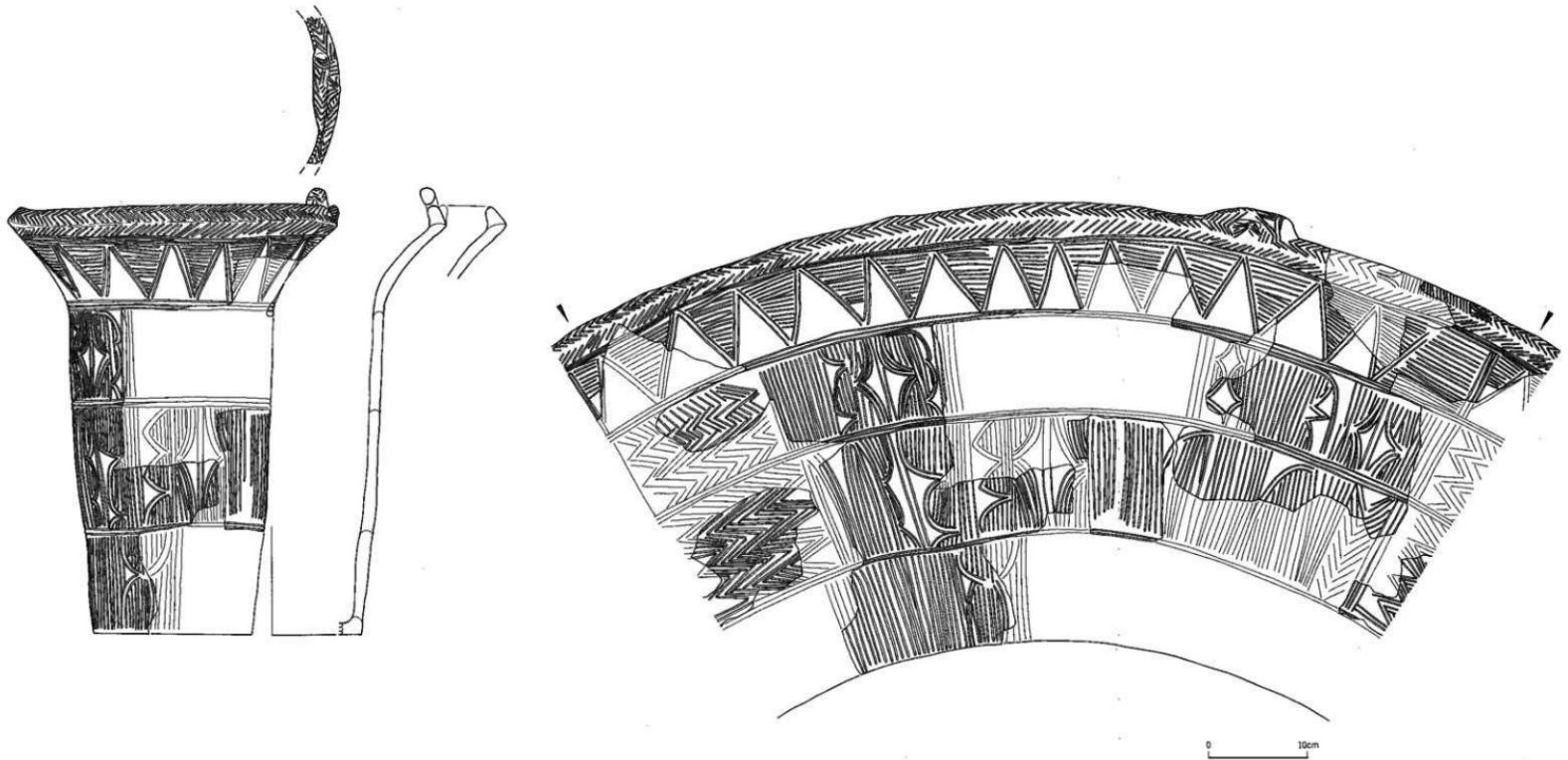
遺物の出土は認められなかった。

3. 土器集中遺構（第10・11図）

調査区の西端、A-A'グリットに位置する。0.4×0.3mの円形プランを呈し、深さは0.3mを測るピット状遺構の直上ないし内部に、土器片が重なるようにまとめて検出された。恐らく土圧によって押しつぶされたとの見方ができよう。土器は大型の深鉢で底部がストレートに直立し、頸部からラッパ状に外反する口縁部の上端で、「く」の字状に内折する形状である。また口縁端部には、穿孔を有する突起が一ヶ所設けられる。器面には、半截竹管状工具を多用した沈線文による幾何学的な文様が描かれる。その構成は、横位に6分割する文様帯を形成し、内部を縦位、斜位、羽状などの集合沈線文の充填を基本とする。またそれに、連続する鋸歯状区画文や、縦位集合沈線内に弧状、「U」字・菱形などの沈線文が組み合わされる。この土器は、縄文時代中期初頭梨久保式に比定されようが、諸磲C式・晴ヶ峰式の系譜を受け継ぐ集合沈線文系土器（踊場式）の典型的な一例と言えよう。



第10図 土器集中遺構実測図



第11图 土器集中遗物出土遗物夹测图

第2節 遺構外出土土器

1. 繩文時代早期（第12図1）

本時代末葉に属する条痕文系土器が、1点のみ出土している(1)。表裏面共貝殻状工具により、横位・縦位に条痕を施すものである。どちらかといえば、浅めの条痕で、裏面には一部にみられるだけである。また土器の内部には、織維物の混入が観察できる。

2. 繩文時代前期（第12図2～10）

繩文のみ施すものと、沈線を施すものとに分類されるが、すべて器形の判別できない小破片のみである。

第1類（2～9） 2～9は、すべて斜状に単節RL繩文を充填するもので、比較的太めの原体による施文を行なっている。6・7は、施文される繩文と繩文の間に、わずかながら隙間を有している。8は、繩文を施した後に、指ナデによるとと思われる摩り消しが横位に認められる。またすべてに、雲母・長石・石英を中心とした、砂粒が多く混入している。

第2類（10） 10は、外反ぎみに立ち上がる底部片で、やや細目の半截竹管状工具により縦位・斜位・横位にと、幾何学的な文様構成を行なうものである。晴ヶ峰・躊躇式に比定されようが、後述する中期初頭（梨久保式）のものと、大きな差異は感じられない。

3. 繩文時代中期（第12図11～26）

繩文時代中期に属するものは、中期初頭梨久保式（11～25）と中期後葉（26）のものとに大別されるが、これも器形の判別が困難な小破片のみの出土である。

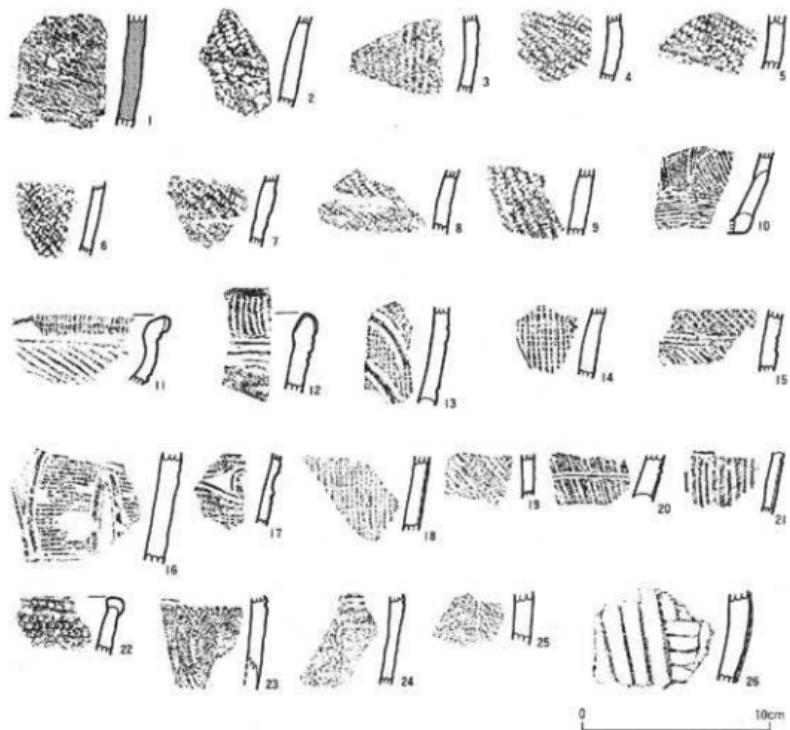
第1類 中期初頭に属するものは、施文の違いにより更に分類される。

1a (11～22) 半截竹管状工具による沈線文を主体に文様構成を行なうものである。11は、内湾ぎみに立ち上がる口縁部の上端で「く」の字状に外へ屈曲させる形状で、口縁端部は連続する爪形文を、その下は横位に沈線区画による斜位沈線文を施している。12は、まっすぐ外反するキャリバー型の口縁部片である。口縁端部は単節LR繩文を施しており、連続する爪形文を意識したのであろうか。またその下は、横位沈線文を施し、無文部を有している。13は、地文に繩文を施し、大小2種の竹管状工具を多用し、弧状？・格子目状の沈線文による文様構成を行なっている。14は、沈線区画による細かな格子目状沈線を施すものである。15は、格子目状と斜状沈線文が、横位沈線文によって区分されるものである。16は、太めの竹管状工具による「Y」字・「U」字・横位の沈線文と、細目の竹管状工具による横位集合沈線文とで、文様構成を行なっている。17は、比較的薄手の器壁で、格子目状沈線が充填され、曲線状の沈線によって三角形に印刻状の凹みを形成している。18は、縦位集合沈線文を充填した後に、一定間隔

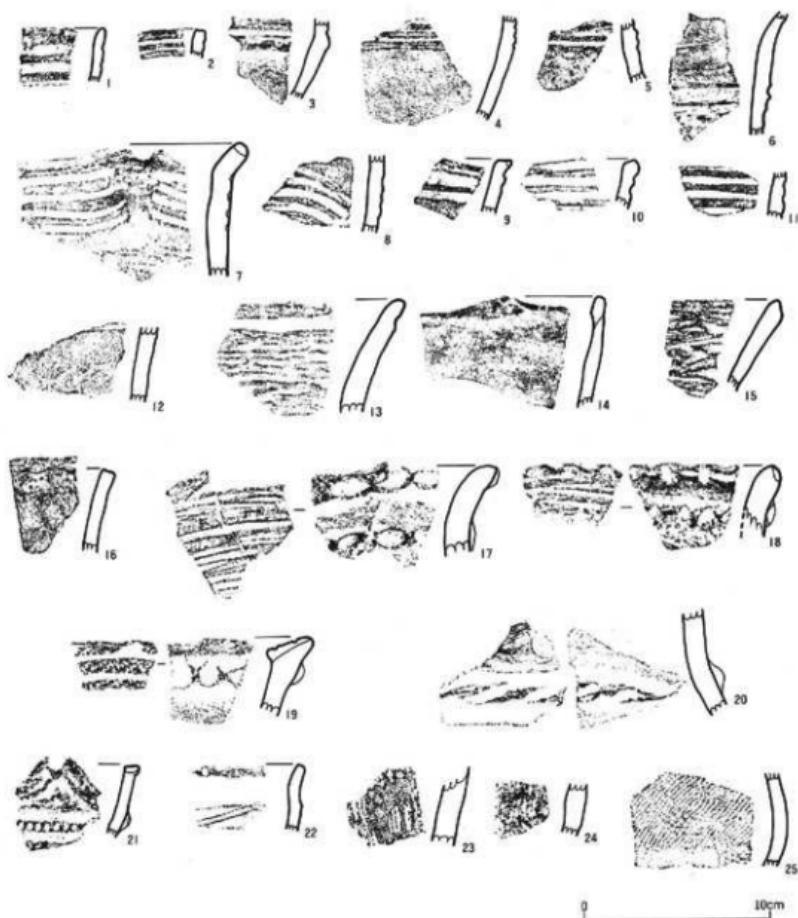
をおいて横位にヘラ状工具によって沈線を施している。19は、斜位に沈線を施した後に、格子目状に更に沈線が横切られるが、部分的にみられるだけで統一性がみられない。20は、斜位に沈線を施した後に、横位に沈線が横切られる。21は、横位沈線区画と思われる、縦位沈線文によるものである。22は、端部が貼り付けによって膨らみをみせる口縁部片で、竹管状工具の断面部を押しつける円形印刻文を、横位に列状を成して、充填させるものである。

1 b (23~25) - 縄文を主体に文様構成を行なうものである。23~25は、単節RLとLRの2種の組合せによる、結節羽状縄文を縦位に施すもので、一定間隔をおいて施文するため、施文されない無文部を残している。

第2類 (26) 中期後葉に属するものは、1点のみの出土であり、梨久保B式に比定されるものである。26は、隆線文によって弧状ないし籠目状に装飾を施しキャリバー形を呈する口縁部片である。



第12図 遺構外出土土器拓影図 I



第13図 遺構外出土土器拓影図2

4. 縄文時代晩期～弥生時代中期（第13～17図）

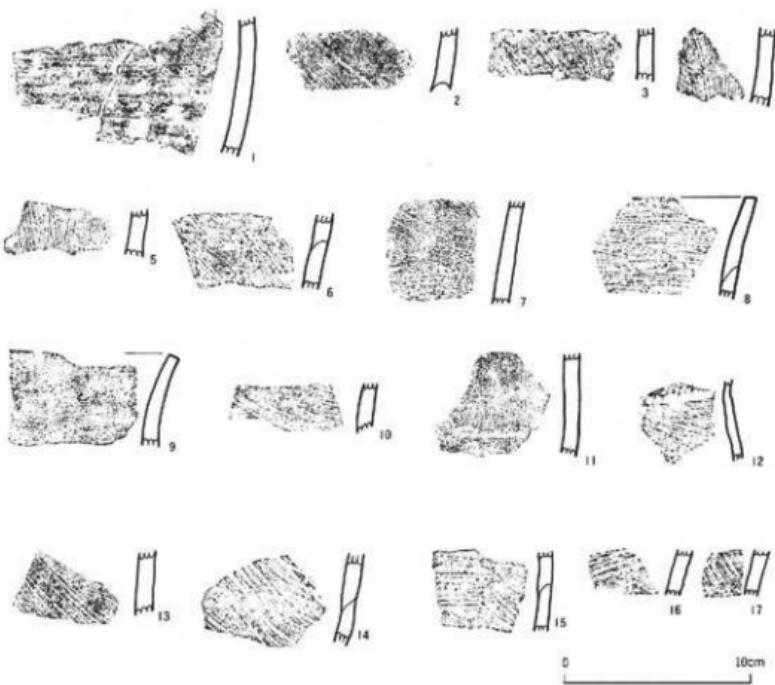
今回の調査では、II層中より条痕文土器を主体とする縄文時代晩期末葉から弥生中期初頭に位置づけられる土器が最も多く出土している。口縁部形態により、甕ないし深鉢・浅鉢・壺などの器種の存在が確認できるが、そのほとんどが器形の判別不可能な細片であった。よって今回は、これらを一括土器群として捕らえ、調整・胎土・色調・焼成などの観察を加え器面に施された文様を中心に分類を行ないたい。

第1類（第13図1～13） やや太めの棒状工具を使用し、口縁部ないしその付近に數条の横位平行沈線を施すものである。またその中には沈線を施すことによって、半隆帯を意識的に作り出すものも含まれる。器種は、深鉢ないし甕が主体を占め、断片的ではあるが浅鉢・壺も認められる。胎土は比較的よく精選され、焼成も良好である。色調は全体的に暗茶褐色・黒褐色を呈しているが、淡茶褐色・明茶褐色を呈するものも若干ながら含まれる。調整はナデ後、横位にヘラミガキがなされる。尚、外面に煤の付着したものもみられる。1は、横位に太めの沈線を施すことにより、半隆帯を作り出しているもので、口縁端部は丸く仕上げられている。2は、1に対して口縁端部が丁寧に面取りがなされている。3は、明瞭な隆帯を施し、胴部へ移行する段部を意識するものであろうか。4は、やや細目の工具により横位平行沈線を施すもので、浅鉢かと思われる。5は、壺の頸部片と思われる。6は、直立ぎみに外反する壺の口縁部片で、頸部に太めの横位平行沈線が施され、内面には丁寧なヘラミガキがなされる。また、外面には赤色塗彩される。胎土はよく精選された明茶褐色を呈し、まばらではあるが黒色粒子が含まれ、他とは異質な胎土構成である。7は、ほぼ直立ぎみに立ち上がる口縁部片で、端部が筒状に短く外反する形状である。一定間隔をおいて小突起が設けられ、やや小振りながら波状口縁を呈する甕である。また端部には、ヘラ状工具により面取りがなされ、突起の頂部は棒状工具による圧痕が入る。外面に施される4状の横位沈線文は、小突起の下部で切れて緩やかにカーブして集約する。尚、外面の一部に煤の付着が認められる。9は、口縁端部は面取りされ、小突起を有し、頂部は棒状工具による圧痕が施される。また外面には煤の付着が認められる。10は、7と同一個体のものである。13は、ラッパ状に大きく外反をみせる口縁形態で、端部は丸く面取りされない。沈線は横位に1状のみで、内外面共横位に丁寧なヘラミガキが施される。

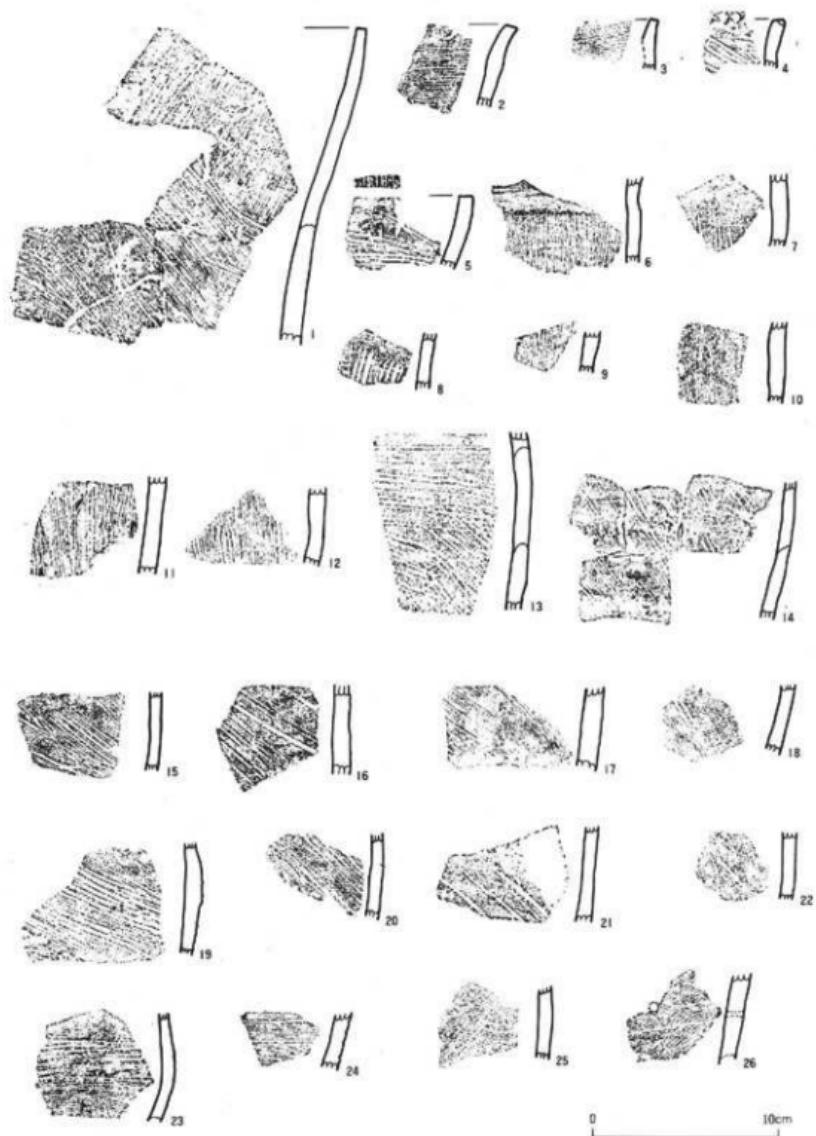
第2類（第13図14～16） 無文土器を総括した。後述する条痕文土器（7類）にみられる、口縁部に無文部を有する甕との関連性を大いに指摘できようが、その接合状況が不明確なため、無文のものだけはそれらと分離することとした。器種は、深鉢ないし甕が主体を占める。胎土は若干砂粒が含まれるがよく精選され、焼成も良好である。暗茶褐色・黒褐色を呈し。明茶褐色のものも含まれる。調整は、ナデ後横位に丁寧なヘラミガキが施される。14は、ほぼ直立する口縁部で、口縁端部に小突起を有し、小振りながら波状口縁を呈するものである。端部にはまた丁寧な面取りがなされる。15は、外反する口縁部の端部がつまみ上げにより、やや直立す

る。16は、面取りされた口縁端部に、繊維束状の工具による圧痕が刻目状に連続して施される。

第3類（第13図17～21） 口縁部ないし口縁部下に、圧痕を伴う突帯が横位に施されるものである。圧痕は、指ないし棒状工具による押圧で、連続して施される。器種は、壺（17～20）が主体を成すと思われるが、浅鉢と思われるものも1点（21）認められる。胎土は、砂粒が含まれるがよく精選され、色調は明茶褐色・暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。調整は、ナデないしヘラミガキが主であるが、条痕が施されるものもみられる（17・18）。17は、短く外反する壺の口縁部で、口縁端部とその下部に2本の突帯を貼り付けており、器壁はやや厚い。内面には、貝殻条痕と思われる荒い条痕が施される。18は、口縁端部は突帯を有さず、棒状工具による沈線を施した後に爪跡を残す指頭圧痕が施される。また突帯の下部及び内面には、荒い条痕が施される。19は、口縁端部に粘土帯の貼付け・面取りにより文様帯を形成しており、単節LR繩文を施した後に2条の平行沈線を走らせる。20は、壺の肩部、特に肩部に位置すると思われ、断面三角形を呈する突帯の頂部に、棒状工具にて斜状に圧痕が施される。また外面には、煤の付着が認められる。21は、波状口縁の頂部に棒状工具による圧痕を施し、やや細目



第14図 遺構外出土土器拓影図3



第15図 造橋外出土土器拓影図4

の突帯文が付くもので、器壁は薄く浅鉢と考えられる。

第4類（第13図22） 浮線縞状文を施すものである。わずか22の1点のみの出土であった。器種は有肩の浅鉢で、棒状工具による圧痕を施す口外帯が認められる。内外共、ヘラミガキされ、胎土はよく精選され明茶褐色を呈し、焼成も良好である。

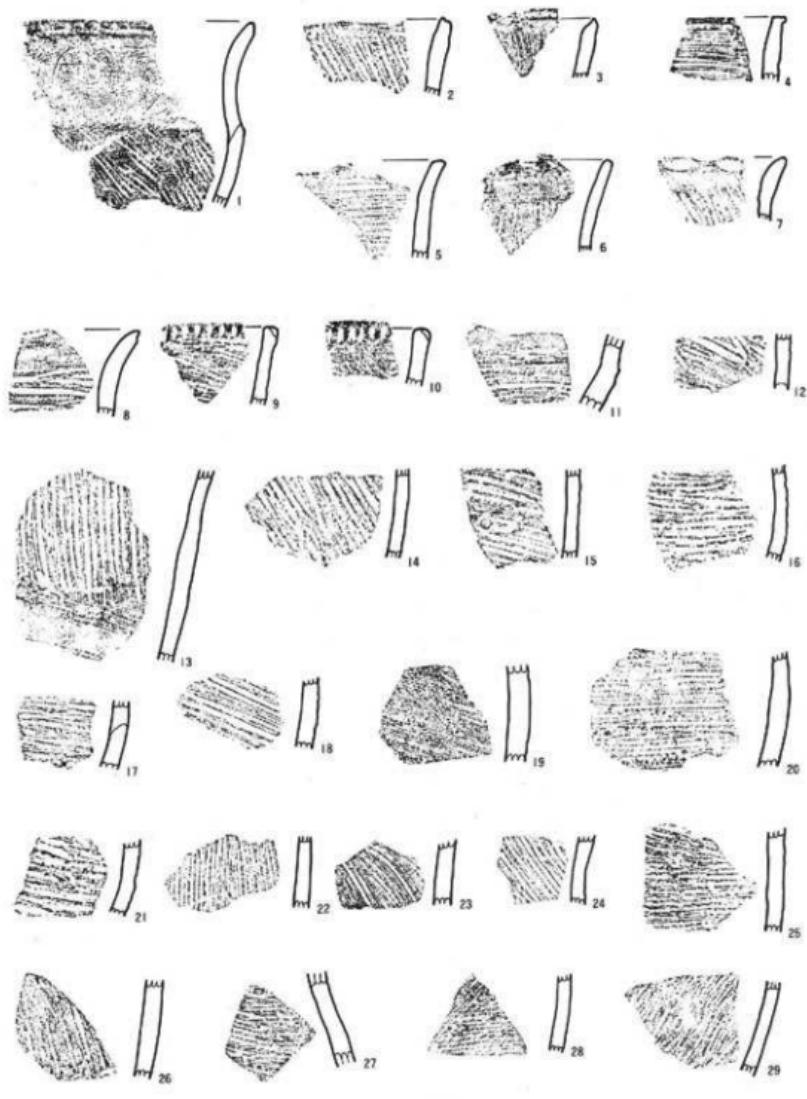
第5類（第13図23・24） 幅広の爪形文を施すものである。施文は、指による爪形ではなく、ヘラ状工具を使用して浅目に爪形状の圧痕を刻み込んでいる。器壁は他と比較すると厚く、胎土も砂粒が多く含まれるが、7類（条痕文土器）と大差はみられない。色調は暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。斐ないし深鉢の脚部と思われるが出土数も6点でかつ小破片であるため、不明な点が多い。1号土壤からも、同類のものが出土している。また圓化できなかった中に、指によると思われる深く幅の狭い爪形文も認められる。

第8類（第13図25） 出土数は少ないが縞文を施すのを一括した。25は、壺の脚部と思われ、単節LR縞文を斜状に施すもので、脚下半には施文されない。胎土はよく精選されて、焼成もよく、赤褐色を呈している。そして、内面にはユビナデの痕跡が明瞭に残る。他に無節LR縞文や、羽状縞文を施すものもみられるが、縞文時代中期の混入品かと思われる。

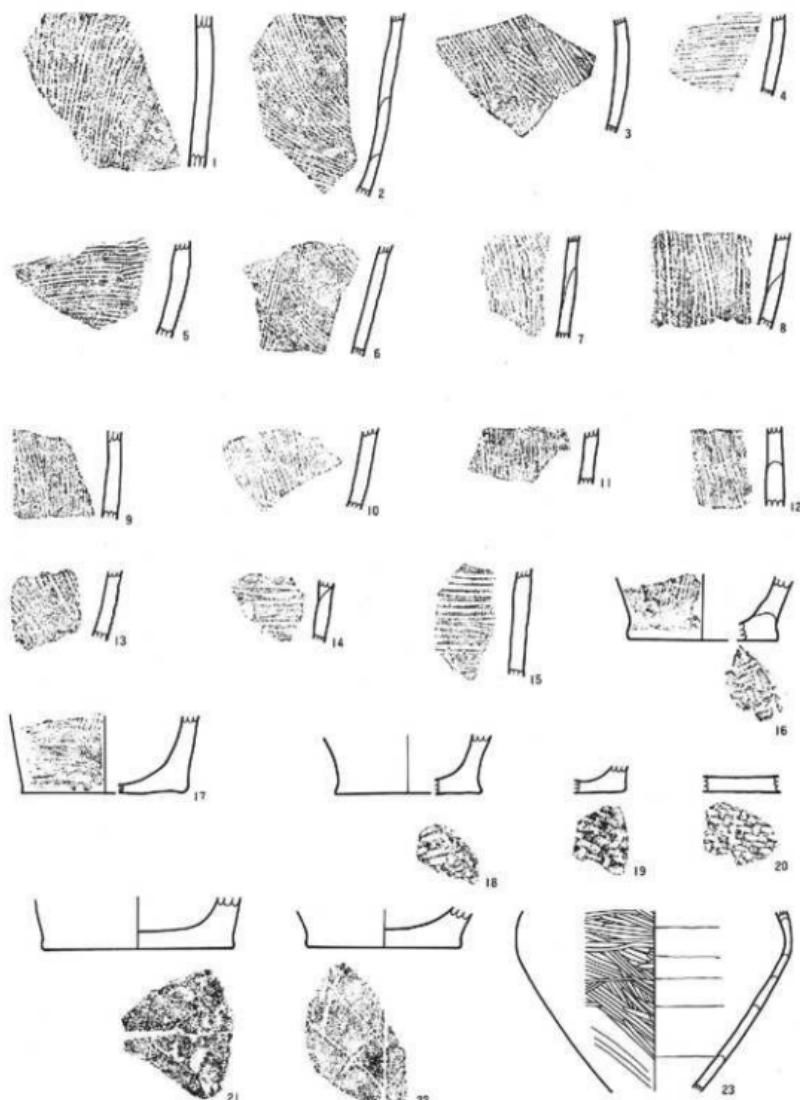
第7類（第14～17図） 条痕文土器を総括する。条痕文土器は、本群において最も出土量が多く、本遺跡の特徴を示すものである。器種は、口縁形態から深鉢及び壺が主体を成しているが、すべて小破片であるため、器形を追えるものは極微量といえる。壺も本類に含まれるだろうが、明確に判断はできなかった。条痕は、施文・調整と両者の要素を有するもので、意識的に工具痕を残していると思われる。また、器面にみられる条痕の凹凸で、數種類の工具を使用し施文を行なっていることが観察される。よって本類は、工具の違いによる器面の施文・調整に視点を当て、更に細分を試んでみる。

7a - ヘラ・棒・板状工具を使様し、工具の木口を器面に当てて、押し引くことによって条痕を施すものである（第14図1～7・9～11・15～17）。施文は、丁寧なナデ後に横位・縦位・斜位と様々な方向になされ、条溝は浅く、工具の細かな繊維の移動が条線となって明瞭に器面に残る。胎土はよく精選されており、色調は明茶褐色を呈している。焼成は非常に良く硬質であり、器壁は厚く、大型の深鉢・壺であろうか。特に3～5は条痕が充填されないため、工具の原体幅が確認できる。9は、緩やかに外反する口縁部片で、口縁端部は丁寧に面取りが成されている。ここにおける条痕文は、文様としての意識は薄く、調整に重点をおくものと思われる。

7b - 半截竹管状工具で押し引くことにより、2本の平行沈線が形成され、沈線と沈線の間の盛り上がりが半円形ないし台形を呈するものである（第14図8・12～14）。工具が深く引きずられれば、盛り上がりに數条の細かな条線として確認され、7aと混同しがちである。また7類にあって、出土量は比較的少ない。8・13は、胎土もよく精選され、焼成も良好で硬く、淡赤褐色を呈している。また8は、緩やかに外反する口縁部片で、口縁端部で丁寧な面取りが成



第16図 遺構外出土土器拓影図 5



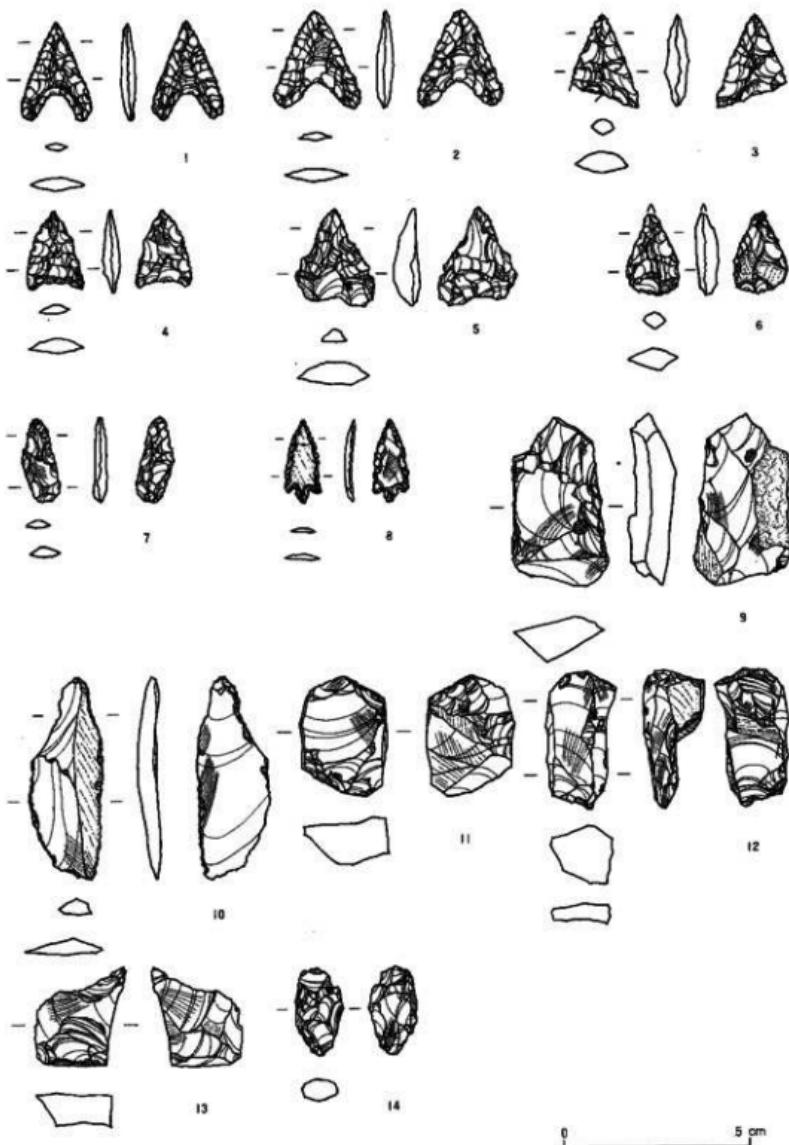
第17図 遺構外出土土器拓影図 6, 同出土土器実測図

される。12は、他と比較しても非常に器壁が薄く、有肩の小型甕と思われる。胎土に砂粒が多く含まれ、明茶褐色を呈し、焼成はあまり良好と言えない。14は、砂粒がまばらに胎土に含まれ、暗茶褐色を呈し外面には煤の付着も認められる。焼成は良好である。

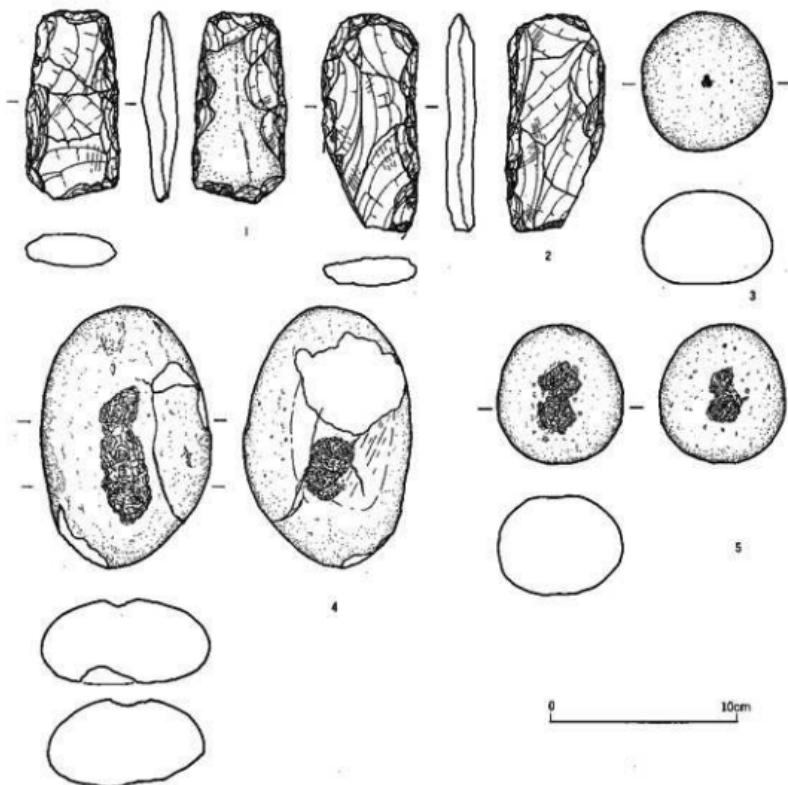
7 c - 細い棒状ないしヘラ状工具を使用し、沈線状に押し引かれるものである(第15図)。工具は単独で、または數本束ねることにより櫛状工具を更に作出して施文される。施文方向は、斜位が最も多く横位・縦位もみられるが、斜位に組み合わされるものが多い。胎土は全体的によく精選されるが、11・13・21は砂粒が多く混入する。色調は、暗茶褐色ないし淡黄褐色を呈し、焼成は良好といえる。調整は、外面はナデ、内面はナデないしヘラケズリが成されるが、中には内面にヘラミガキされるもの(1~3・14・15・23)も含まれる。1は、やや内湾ぎみに緩やかに立ち上がる深鉢の口縁部で、口縁端部は丁寧な面取りが成される。条溝は深く断面は丸い。条間はバラバラであり、単独の工具によるものと思われる。4は、口縁端部が面取りされた後に、外面の縁をヘラ状工具によって連続する刻目が施される。条痕は斜位に施され、条溝は深く、断面が鋭利的である。5は、口縁端部が面取りされた後に、ヘラ状工具で刻目が施され、単位は不明であるが數本の櫛状工具によって横位・斜位に条痕がみられる。6は、有肩の甕で、条痕は5本一単位の櫛状工具により縦位に施される。11は、2本一単位の櫛状工具による条痕である。13は、7本一単位の櫛状工具により、胴部の下から上へと斜位・横位に条痕を重ねて充填する。また外面には、煤の付着が頗著に認められる。26は、焼成前の穿孔が入るものである。

7 d - 二枚貝などの貝殻の使用によると思われる、貝殻条痕文である(第16図2~29)。条溝は幅広で断面は丸く、条間は狭くてあいまいである。施文は、横位・縦位・斜位とさまざまである。胎土中に長石・石英などの小礫が多く含まれるものが多く(2・6・7・13・15~22・24~29)、東海地方にみられる貝殻条痕文と類似性が指摘できよう。色調は、暗茶褐色、赤褐色が主で、淡黄褐色を呈するものもわずかながら含まれる。調整は、外面はナデ、内面はナデないしヘラケズリによるものがほとんどで、ヘラミガキがなされるもの(9~12)も含まれる。2は、口縁端部下に無文部を残さず条痕が施されるが、3・6・7は無文部を意識的に残す。5は、やや小振りながら波状口縁を呈するもので、口縁端部は面取りされる。9・10は、口縁端部にヘラ状工具により連続する刻目が施される。11は、有肩の甕と思われ、肩より上部は無文である。12は、条痕を施した後に、棒状工具により屈曲する沈線を描くものである。13は、縦位に条痕を施した後、その端部を切るように纖維束状の工具により条痕が施される。16は、小礫の混入量多く、淡黄褐色を呈しており、他とかなり異質である。

7 e - 7 d の貝殻条痕より条溝の幅が狭く、櫛状工具?による細密条痕である(第16図1、第17図1~15)。条溝の断面は丸く、7 d と同様に条間は狭くあいまいである。また7 a とやや近似する。施文方向は、斜位がほとんどで、横位・縦位もみられる。胎土は、砂粒を含むが、



第18図 遺構外出土石器実測図1



第19図 遺構外出土石器実測図 2

小縫の混入は認められない。色調は、暗茶褐色・淡黄褐色を呈する。調整は、ヘラケズリ後ナデないしヘラミガキが主である。第16図1は、口縁部は緩やかに外反する？有肩の甕である。口縁部は無文で、端部に口外帶を有し、明瞭な肩から斜位に細密条痕を施している。第17図1（以下第17図を省略）は、内外面共、煤の付着が認められる。2～4・6は、同一個体であり、外面に煤の付着が認められる。5は、横位に羽状ぎみに条痕を施す。

7f-底部を一括して本類として扱う（第17図16～22）。ほとんどが平底であるが、1点のみ上げ底ぎみのものが含まれる（17）。底部の縁が若干張り出して、直立ぎみに外反する形状であり、底面には網代痕（16・18～20）、木葉痕（21・22）が認められ、ヘラケズリ後ヘラミガキされるもの（17）もみられる。また21は、底面に植物種子と思われる圧痕が認められる。

5. 弥生時代後期（第17図23）

23は、ソロバン玉状に膨らむ形状の壺の胴部で、外面は下部よりヘラミガキがなされ、内面はナデによる調整が行なわれる。また内面には輪積み痕が明瞭に残る。赤色塗彩はされない。文様は欠損しているが、形状・調整からみて、弥生時代後期座光寺原・中島式に比定されよう。

第3節 遺構外出土石器（第18・19図）

遺構外より出土した石器は、ほとんどが、II層中より出土しており、条痕文を中心とする土器群に共伴すると思われる。内訳は、石鎌8点、使用痕のある剝片石器2点、ピエスエスキュー3点、石錐1点、打製石斧2点、磨石・凹石・敲石3点であり、すべて図化した。また、II層中より単的ではあるが黒曜石の石核が8点出土している。

石鎌（第18図1～8） 1・2・4は、両面調整により丁寧な作出が行なわれる凹基無茎鎌である。1・2は、基部の抉りが大きく3・4は緩やかに入る。5は、加工途中の石鎌として捕らえたが、両側縁部がやや抉りぎみであるため石錐かもしれない。6は、円基鎌で裏面に自然面を残す。7は、凹基ないし平基無茎鎌として加工・使用がされたものと考えられるが、基部の欠損のため二次加工を施している。8は、小型の凹基有形鎌で、表面は自然面を、裏面は一次剥離面を残し、側縁部のみ両面調整で作出するものである。石質はすべて黒曜石である。

加工・使用痕のある剝片（第18図9・10） 9は、自然面を残す厚手の剝片に、両側縁部は片面より粗雑な剥離を施す。10は、一次剥離面を残す薄手の剝片で、両側縁部に使用痕と思われる細かな剥離が片面より加えられる。石質は9・10共黒曜石である。

ピエスエスキュー（第18図11～13） 11～13は、ほぼ四角形を呈する厚手の剝片で、頂・基部共片面より打撃が加えられる。石質は黒曜石である。

石錐（第18図14） 線長の剝片を両面調整により、断面は梢円に作出され、頂・基部は欠損したと思われる。石質は黒曜石である。

打製石斧（第19図1・2） 1は、裏面に自然面を残す短冊型で、側縁は丁寧に細かな調整がみられ、刃はやや後退する。2も短冊型に属し、刃部は後退し更に欠損する。頂部も刃部として使用されていた可能性がある。1・2共、砂岩である。また1は、III層より出土したものである。

磨石・凹石・敲石（第19図3～5） 3は、傷状の小さな凹痕が片面に認められる。4は、表面に4ヶ所、裏面には2ヶ所凹痕が重複する。また火力を受けて、赤褐色を帯び一部欠損もみられる。5は、表裏面共に2ヶ所づつ浅めの凹痕がみられ、周縁部は敲打による打痕が認められる。尚、石質は、すべて花崗岩である。

第V章 まとめ

今回の発掘調査は、箕輪町農業集落排水事業による長岡排水処理場の建設に伴うものであり、長岡扇状地に広がる遺跡群内に初めて調査の手が加えられ、その内容の一部に触れることができた。その結果、縄文時代早期から弥生時代後期に至るまで、断続して遺跡が営まれてきたことが明らかになった。また今回、限られた範囲での調査ということもあるが、各時代の遺物の出土は認められるものの住居址の検出には至らず、居住域としての性格を明確に捕らえることができず残念であった。しかし、II層（黒褐色土層）より、条痕文土器を主体とする縄文時代晩期末葉から弥生時代中期初頭にかけての良好な一括土器群を出土したことは、過去に例の無いことであり、箕輪町の歴史を解明する上でも大きな成果であったと言えよう。さて本章では、前章で述べてきたそれらの内容について問題点を提起し、若干の考察を加えてまとめたい。

まず、古神遺跡の所在する一帯に人の居住はないし動きが始まるのは、縄文時代早期末葉である。しかしその実態は、本時期に属する土器片が1点だけ混入していたことにより判明されたことであって、内容については不明と言わざるを得ない。それは、後述する縄文時代前期においても同じことが言える。これによって指摘されることは、周辺ないし比較的近接した場所に遺跡の存在する可能性があることである。

そして縄文時代中期に入ると、集落の一端が浮き彫りにされてくる。調査区の西北部からは、縄文時代中期初頭葉久保式の一個体がまとまって出土している。住居址などの施設に伴う根拠が認められないで、土器集中遺構として扱ったが、個体としての出土のあり方はたとえ住居址の存在が認められなくても、縄文時代中期初頭における集落域に含まれると理解しよう。この様な単独での土器の出土は、平成元年に行なわれた本遺跡の南方に所在する大垣外遺跡の調査でもその類例がみられる。大垣外遺跡では、同じく縄文時代に属し、土壤群に囲まれての出土であり、住居址の存在はなかった。これら一連の遺構は、土器の廃棄・放置などある性格を持つものと思われるが、更に他の類例と合わせて再度検討する必要がある。

次に、今回の調査で最も出土量の多かった縄文時代晩期末葉から弥生時代中期初頭にかけての土器群についてであるが、そのほとんどが遺物包含層（II層）出土ということで、この時期の遺跡に多くみられる出土状況を古神遺跡でも示していた。また、出土した5基の土壤は、本時期に対応すると思われるが、その形状もさることながらその検出状況もあいまいで、遺構として捕らえるべきものであるかはっきりとせず、不本意な確認となってしまった。しかし包含層出土とはいえ、条痕文土器を主体とする土器群のあり方は、特に中南信地方に多く検出例がみられ、本遺跡が条痕文土器の全体に占める割合が高いことは、東海地方より波及してきた条痕文系土器文化がより浸透した結果といえるだろう。それは同時に、箕輪町における弥生時代の夜明けでもあり、町の南部の沖積地に広がる箕輪遺跡での稻作が開始される頃で、その

関連性は大いに指摘できるものである。尚、土器は、器面に施された文様を中心に細分を行なったが、あくまでも器形の判明できない小破片によるものであって、その方法については若干問題があるかもしれない。しかし、今回の良好な一括資料の提供は、弥生時代への黎明期における文化研究に、少なからずも一助となれば、大きな成果であったといえよう。また今後、多くの研究者のご教示をいただければ幸いである。

末筆ではありますが、調査の進行に当たり深いご理解とご協力をいただきました長岡区を始め、直接調査に従事されました団員の方々に厚くお礼申し上げます。

参考文献 (著者名50音順)

- 愛知考古学談話会 1985・1988 「〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題」
- 飯田市教育委員会 1980 「中尾・天神遺跡」
- 伊那市教育委員会 1979 「末広大道原遺跡」
- 太田 保 1971 「長野県上伊那郡中川村片桐苅谷原遺跡の一括土器について」長野県考古学会誌10号
- 大参義一 1972 「縄文時代から弥生式土器へ」名古屋大学文学部研究論集
- 岡谷市教育委員会 1986 「梨久保遺跡」
- 北武藏古代文化研究会・千曲川古代文化研究所・群馬県考古学談話会 1983 「東日本における黎明期の弥生土器」第4回三県シンポジウム
- 神村 透 1966 「弥生文化の発展と地域性—中部高地」日本の考古学3 河手書房
- 神村 透 1967 「豊岡村林里遺跡」長野県考古学会誌4号
- 紅村 弘 1967 「水神平式土器とその周辺」信濃19-4
- 小坂井町教育委員会 1961 「森東—篠東第二次・經王・行明調査報告書」
- 駒ヶ根市教育委員会 1979 「荒神沢遺跡」
- 鈴木道之助 1981 「石器の基礎知識III—縄文」柏書房
- 設楽博己 1982 「中部地方における弥生土器の成立過程」信濃34-4
- 高遠町教育委員会 1990 「原勝間遺跡」
- 長野県教育委員会 1973 「うどん坂II」県中央道埋文調査報告書 飯島町内その3
- 長野県教育委員会 1973 「南高根遺跡・北高根A遺跡」県中央道埋文調査報告書 南箕輪村その1、2
- 長野県教育委員会 1973 「細ヶ谷B遺跡」県中央道埋文調査報告書 伊那市西春近
- 長野県教育委員会 1973 「荒神沢遺跡」県中央道埋文調査報告書 諏訪市その1、2
- 長野県教育委員会 1976 「新井南遺跡」県中央道埋文調査報告書 岡谷市その3

- 長野県教育委員会 1976 「御社宮司遺跡」県中央道埋文調査報告書 茅野市その5
- 長野県教育委員会 1980 「経塚遺跡」県中央道埋文調査報告書 岡谷市その4
- 長野県教育委員会 1982 「中島A遺跡・大洞遺跡」県中央道長野線埋文調査報告書1
- 長野県史刊行会 1891 長野県史 考古資料編 全1巻(1) 遺跡地名表
- 長野県史刊行会 1983 長野県史 考古資料編 全1巻(3) 中・南信版
- 長野県史刊行会 1988 長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物
- 永峯光一 1969 「水遺跡とその研究」石器時代9 石器時代研究会
- 中村五郎 1988 「弥生文化の曙光—撲文・弥生両文化の接点」未来社
- 中村友博 1987 「水神平式土器」弥生文化の研究4 弥生土器II 越山閣
- 林茂樹・太田保 1965 「縄文時代の上伊那」長野県上伊那誌 第二巻歴史編
- 松本市教育委員会 1987 「松本市赤木山遺跡群II」
- 丸山 敬一郎 1966 「長野県下伊那郡天竜村平岡南遺跡出土遺物について」信濃18-4
- 三上徹也 1987 「梨久保式土器再考」長野県埋蔵文化財センター紀要1
- 箕輪町教育委員会 1989 「一之沢遺跡」
- 箕輪町教育委員会 1990 「大垣外遺跡」
- 箕輪町誌編纂刊行委員会 1976 箕輪町誌 第1巻 自然・現代編
- 箕輪町誌編纂刊行委員会 1986 箕輪町誌 第2巻 歴史編
- 山本典章 1988 「五領ヶ台式土器様式」縄文土器大観3 中期II 小学館

図 版



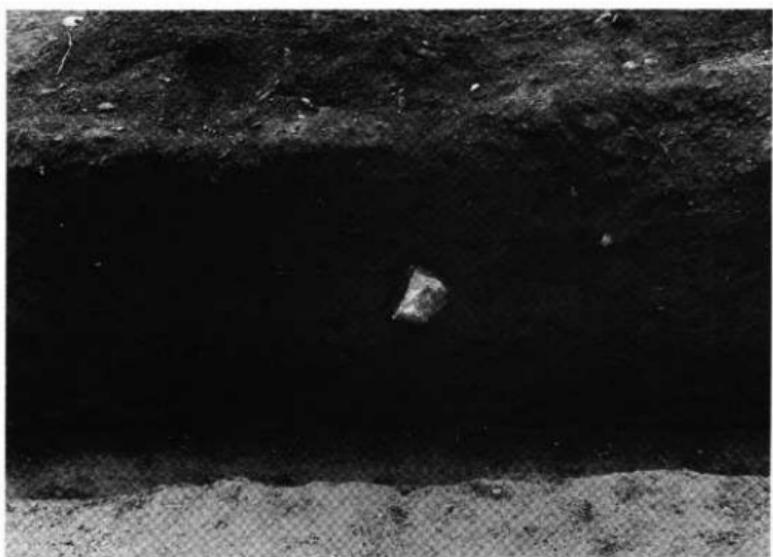
遺跡地遠景（東方より）



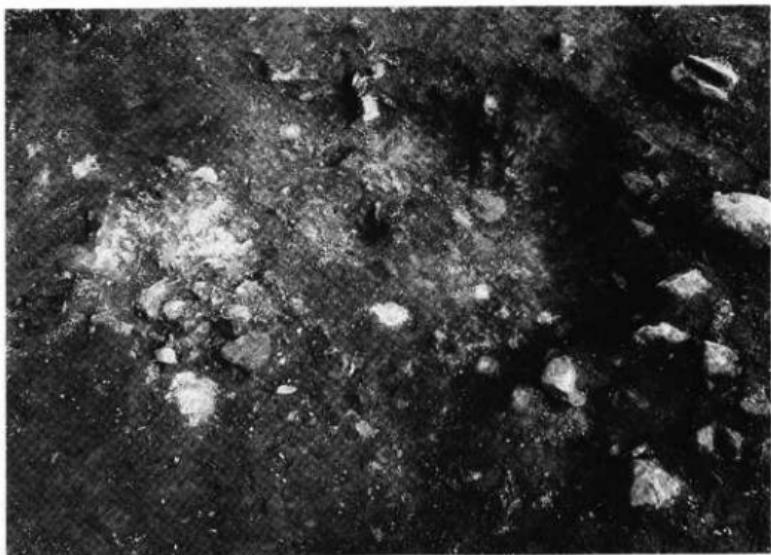
調査地近景（東方より）



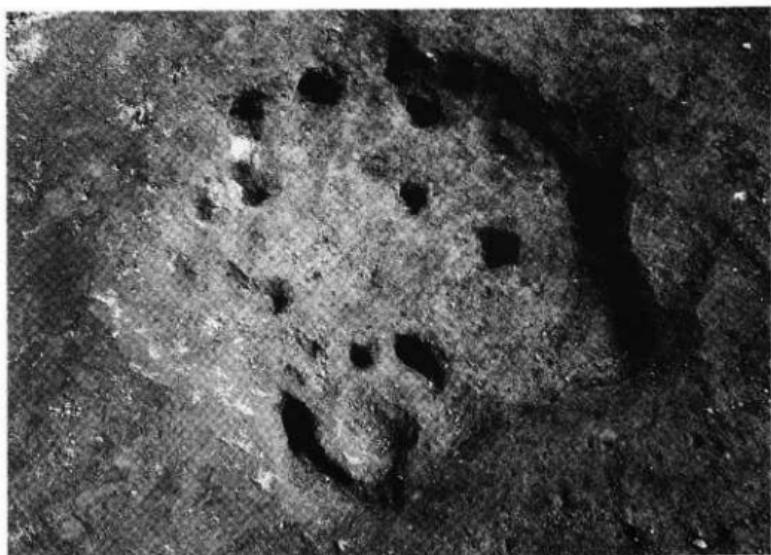
調査区全景



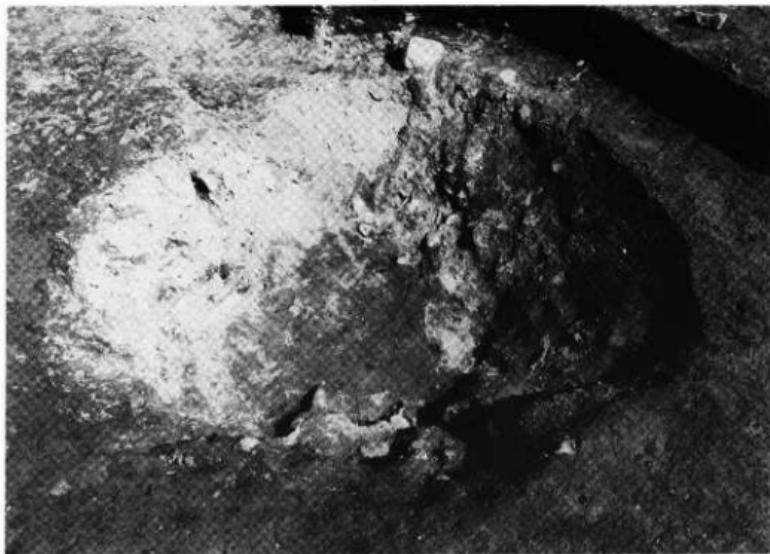
土層断面
— 40 —



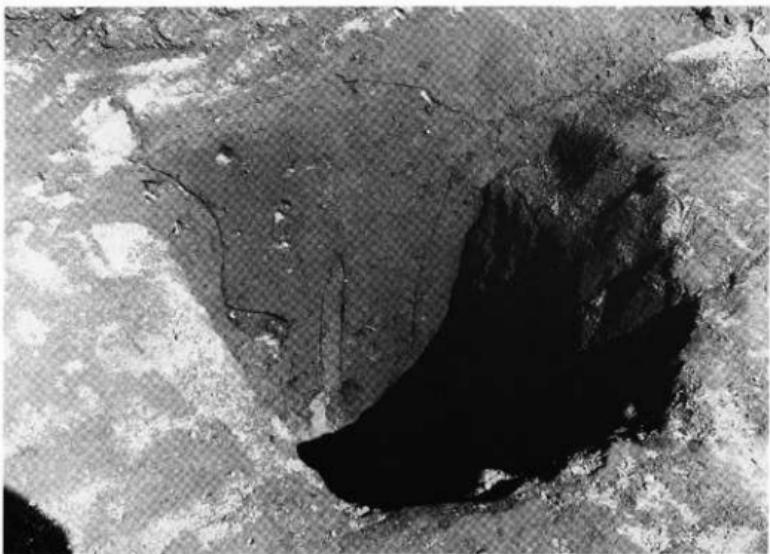
1号土壤



2号土壤
— 41 —



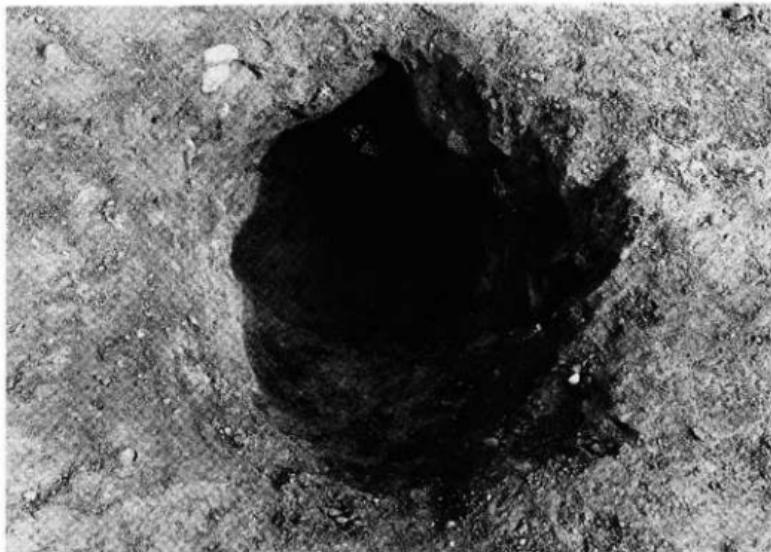
3号土壤



4号土壤
— 42 —



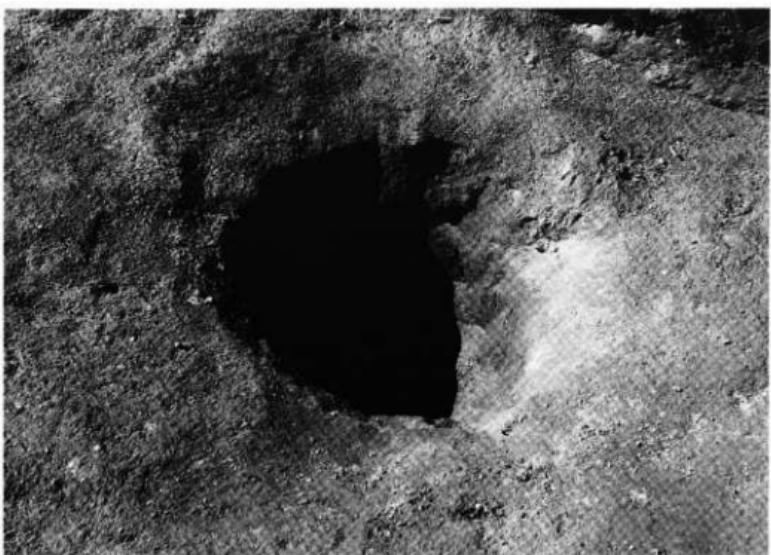
5号土壤



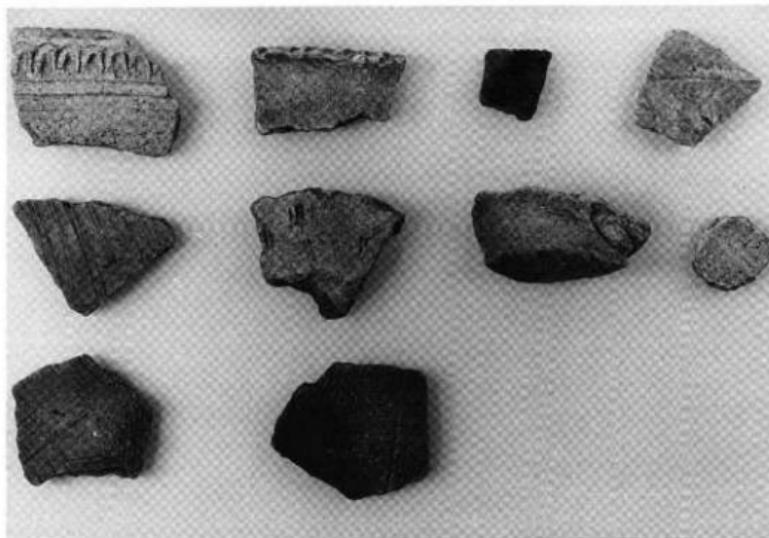
ピット状構造



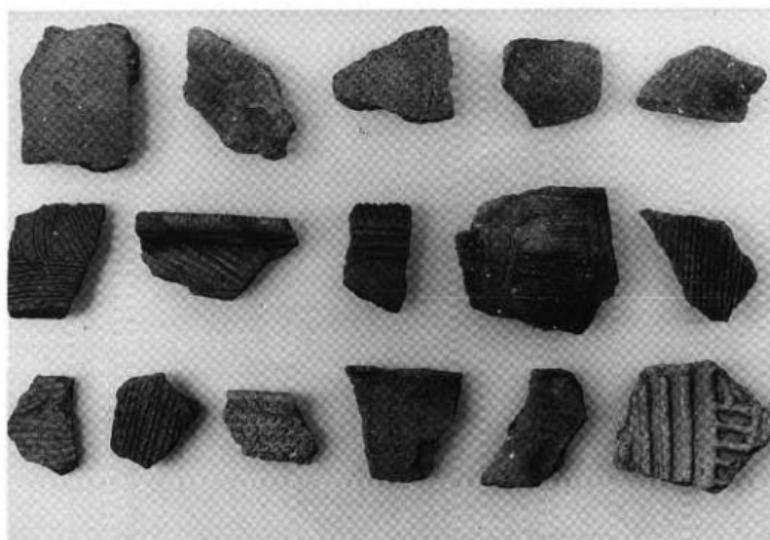
土器集中遺構



土器集中遺構下のピット状遺構



土壤出土土器



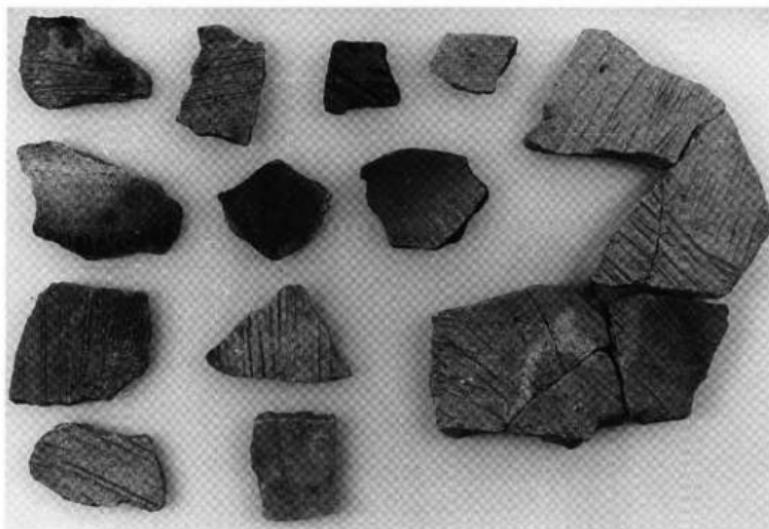
遺構外出土土器 1



遺構外出土土器 2



遺構外出土土器 3



遺構外出土土器 4



遺構外出土土器 5

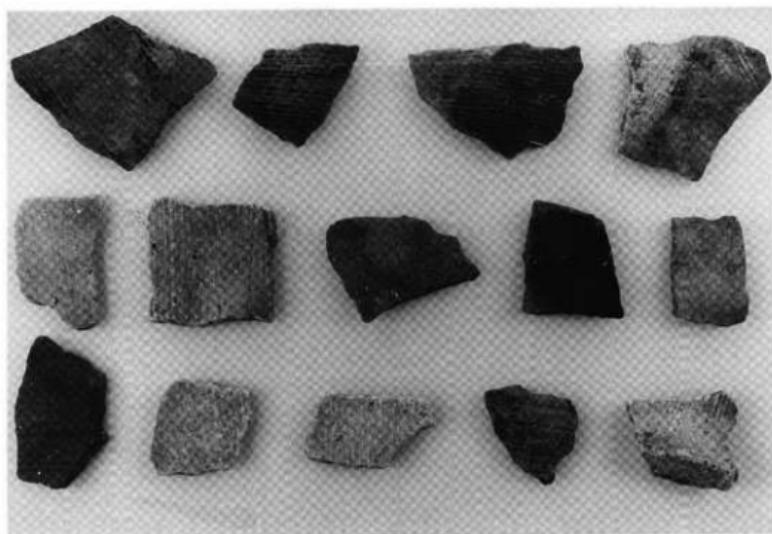
図版
10



遺構外出土土器 6



遺構外出土土器 7



遺構外出土土器 8



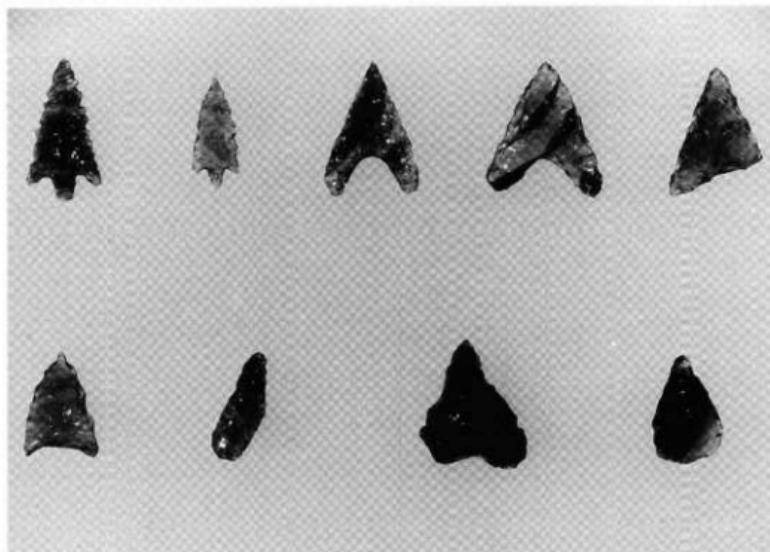
遺構外出土土器 9



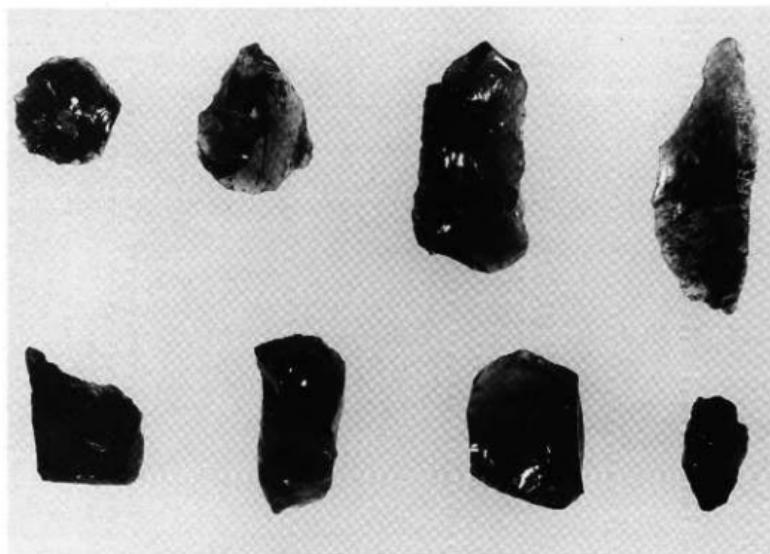
土器集中遺構出土土器



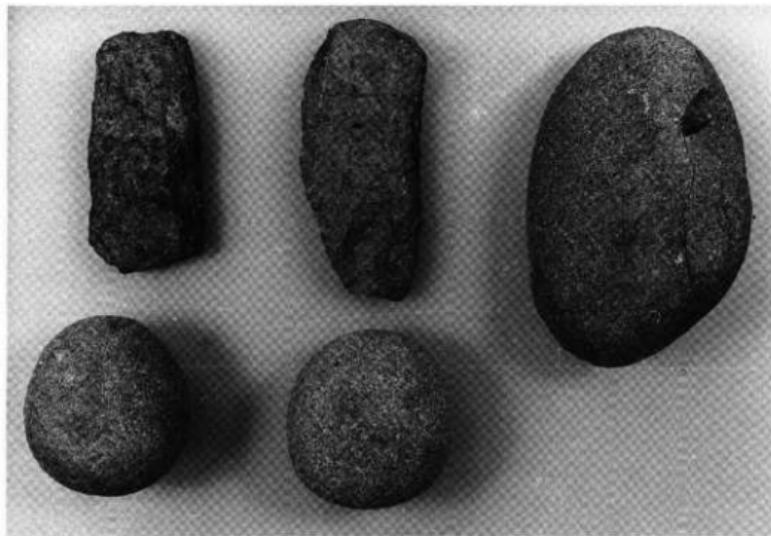
遺構外出土弥生土器



出土石器 1



出土石器 2



出土石器 3



調査参加者

古 神 遺 跡

箕輪町農業集落排水事業、長岡排水処理施設
建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成3年3月20日 印刷

平成3年3月20日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会

印刷所 ミウラ企画書籍